

# 人間の尊厳—尊厳は支配関係に由来する—（論文集）

近藤良樹

目次

第一章 人間の尊厳・個人の尊厳—「尊厳」は、支配関係に由来する—

第二章 「不可侵」の尊厳—尊厳は、侵される—

第三章 尊厳の厳しさ厳めしさ—厳かなものへの拝跪

(補) **The Dignity of Human Being, State, or God -the Original Meaning of Dignity-**

キーワード：尊厳，神聖，尊敬，支配，不可侵，厳しさ，厳かさ，拝跪，

dignity, inviolate, domination, severity, solemnity, respect, genuflect

## 第一章 人間の尊厳・個人の尊厳

—「尊厳」は、支配関係に由来する—

はじめに

尊厳(dignity, Wuerde)ということばは、「国家の尊厳」「神仏の尊厳」など、超越的なものを賛美するために使われてきた。戦後は、国家等の全体による人間無視を戒めるものとして、「人間の尊厳」（ドイツ憲法冒頭）とか、「個人の尊厳」（日本国憲法）がうたわれた。その後、生命倫理や

環境倫理では、「人間の尊厳」「生命の尊厳」ということばが、一部では過激に使用されるようになり、ひとの「DNAの尊厳」までがいわれるようになってきた。尊厳のことばは濫用され「インフレ」<sup>1)</sup>を起し、批判や議論をストップさせる威嚇的な用語として、あたかも「水戸黄門の印籠」のように使われているとも言われる。

「尊厳」がインフレを起し、尊厳に似つかわしくないものにまで使用されることがあるとしても、なお、「尊厳印」を突きつけると、ひとを黙らせ拝跪させる効果をもつのは、かつての「神仏の尊厳」に代表される古典的な「尊厳」の意味内容が保持されつづけているからであろう。本章では、インフレを起しているといわれる応用倫理的な「尊厳」に限定することなく、ふつうの場面で使用されている現代の尊厳一般の構造を少し分析して見たいと思う。

### 1. 尊い上位存在の至上化

**(上位の相対的頂点化)** 尊厳というと、なにより「神仏の尊厳」があげられよう。信じられる神仏は、尊く、厳かであり、ひとという下賤なものうえにそびえる超越的な存在である。尊厳を有するものは、至上の価値があって大切にされるべきもので、尊く恐れ多いものとして下賤なものは引き下がり、これを汚さないようにと上に遠ざけて頂くものであろう。

これは、神仏のみのことではない。尊厳を有するものは、身近の「父親の尊厳」「課長の尊厳」にしても同様であろう。尊厳といわれる限り、上位の頂点に頂くものになる。至上化することになる。父親は、祖父母の前では、かげがうすくなるが、「父親の尊厳」というときには、祖父母のことは考慮外におき、この父親が頂点にいだかれるのではないか。こどもは、父の尊厳のまえにひれふすとき、父親がすべてであって、いたづらをして父親の前で小さくなり、威厳をもった叱責にひれふし、これを絶対的な声として聞きいれる。「課長の尊厳」をいうときも、課長の部下たちは、そのうへの部長や社長を考慮の外において、課長を相対的にではあれ、頂点において至上化して尊敬の念をもって見るのである。

**(人間の尊厳)** 現在、尊厳ということで一番ポピュラーなのは、おそらく「人間の尊厳」であろう。「尊厳」においてあつかわれるとき、人間は、どう見なされているのか。この世の存在の頂点にあるもの、無機自然はいうまでもなく、生命ある動植物のその進化の頂点にある、たぐいまれな万物の霊長が人間である。理性をもって自律的であり、自然を支配して、この世界の頂点に君臨しているかけがえのない存在である。その上はない。この世の至上の存在として、尊厳をもつのである。もちろん、神仏のまえで虫けら扱いになったり、国家のまえで単なる消耗品となることもある。神仏や国家のまえでは、蟻や蠅のように小さくしばしば尊厳 (*dignitas*) とは反対に「悲惨 *miseria*」で形容される存在でしかないのだが、「人間の尊厳」というときには、神仏の尊厳は考慮されることなく、ひたすらに人間がこの世の頂点にあるものと至上化され、なににもかえがたく絶対的なものとなる。

(差異の強調—質化) 尊厳を有する頂点のものは、その下位に多くのものを含んでの頂点である。それらの下位のものは、各々の間で当然ながら上位下位の関係にある。この下位から尊厳の頂点にいたるまでの位階は、量的な差異をもって計ることができる。人間の尊厳にしても、その下位に猿がひかえ、さらに下位には他の哺乳類がいて、順をきそっている。遺伝子レベルでいえば、人間と猿の違いは1パーセントの違いでしかないといわれる。量的な差異である。

だが、「尊厳」をもって見るときには、この量的な比較可能な差異を拒否して、比較不可能な質的な優劣におきかえていく。猿と人間の差異は、1パーセントの違いではなく、雲泥の差に、比較を絶した高貴と下賤の関係にされる。尊厳を有する人間は、これを殺せば、殺人であるが、同じ霊長類で第二位にあたる猿を殺しても、魚を殺したり物を壊したのと同等に扱われる。人間は、絶対的な存在であり、比較考量を拒否する質的にまったく別の超絶的な尊い存在とみなされる。

(カントの「比較を絶した絶対的価値」) 「人間の尊厳」というとこれを強調したカントがあげられるが、かれは、尊厳の特徴として、「尊厳、つまりは無条件的で比較を絶した *unvergleichbar* 価値」<sup>2)</sup> という。相対比較を絶った絶対的価値だと。至上化して、これを頂点において、かつ、下位のものをつきはなして異質の尊いものとして絶対化していくのが「尊厳」という取り扱いになるのである。尊厳を有するものは、無比の価値をもった、きわめて特殊的に高級な、下位のものとはまったく異質の比較しようのない立派な中身をもったものだということである。尊厳は「比較不可能性」の特性をもつ。人間の尊厳は、猿に対比しても異質の高度の理性を有して自然に君臨していることにある。したがってまた、神の尊厳は、神に似たものと見なされる第二位の人間をよせつけない。神仏の尊厳の前では人間は虫けらである。

(二分化) 尊厳(dignity)では、尊厳を有する(dignified)ものと、これを持たない非尊厳で(undignified)卑しくみっともないものにと二大別する。おそらく客観的には、多くは、第一位の尊厳を付されたものの下には、僅差で第二位の尊いものがあり、第三位、第四位と並んでいるはずである。しかし、尊厳の視座は、この第二位以下を無視する。第一位ではないものは一律に尊厳を有さない下位とし、第一位のみを絶対的な上位とみなす。あるいは、層をなすものの頂点を尊厳とするにしても、その下位層が幾重にもなっているであろうが、これを無視する。客観的に見れば、三分、四分されてしかるべきものを、尊厳と非尊厳にと二分する。一位のみを決定して、あとのものは、全員、敗者だという、厳しい差別である。

人間の尊厳は、第二位に猿類をもっているが、これを無視し、第二位の猿以下は、非人間、非尊厳とみなして、人間のみを最終勝者として賛美する。この人間も神の前では、尊厳を剥奪され、神の似姿をしていても、「悲惨」「下賤」をもって形容されることになって、単なる被造物にと貶められる。そういうことが自然にも結構ある。万という精子が一つの卵子に入り込む競争をしてたった一本の精子のみが卵子に入ることができる。そのみが勝者で、あとは、二着以下すべて同じで敗者というような競争である。

## 2. 与するものへの外的な価値づけ

各民族は、自分の属する民族に尊厳を帰し、これを絶対的に尊いものとみなす。弱小のごく平凡な民族であっても、これがけなされたりすると憤慨する。自民族は、世界の中心にあって、尊厳を有するものとみなされ、周囲の諸民族を劣るものとし、しばしば、これらに非尊厳(undignified)の形容をもってする。民族紛争ともなれば、自民族の dignity (尊厳) に対して、敵対する民族には、反尊厳としての indignity (侮蔑・侮辱) をもってする。客観的にみると勢力においても、文化度においても、相当に劣悪な状態にあっても、自民族を誇り、優秀と見なしてひいきし、自民族の尊厳を言いたてることになる。

国家やその元首についても同様である。自国は尊厳をもった国家で、元首は尊厳をもったものと見なされる。周囲から客観的に捉えると、惨めで破産しているような国家であっても、無知で傲慢で尊大であるのみの元首であっても、その国民は、偉大な祖国・領袖の尊厳を語る(しばしばそう強制される)。この元首の尊厳(dignity)は、当の国内に限定され、隣国では、みっともない(undignified)尊大なだけの元首として侮蔑(indignity)をもって語られる。

「尊厳」は、至上のものに付されるのであるが、これは、かならずしも客観的に至上・頂点の価値をもつものである必要はないのであろう。尊厳は、客観的な至上の価値にいうのではなく、尊厳をいなく者の主観的な価値づけになるのだといわねばならない。他の者はどうであれ尊厳をいなく者にとって、至上の価値があるのである。価値、つまり、優れ勝るものを持ち、自分たちの求める好ましいものを有すると見なし、それを比較を絶して圧倒的に有している最高のものと評価しているのである。

もちろん、客観的に至上の価値をもつものが主観的にそう捉えられることもある。そういう場合は、尊厳は、客観的な裏付けのある価値付けであり、多くがそれを支持し、その裏づけがあるかぎり、その尊厳は、持続性をもつことであろう。だが、客観性にとぼしい尊厳との評価は、一部が主観的にそう評価するのみであり、部外者が尊厳という評価をもってすることはまれとなる。

(尊厳は、外から付与される) 尊厳は、これを本来的に有するものがそう言い表されて賞賛されているように一見受け取られる。だが、尊厳が尊厳を有するものに内在する価値で、これに固有のものであったとすると、同じ存在が一方では尊厳(dignity)を付され、他方で同時に反尊厳(indignity 侮蔑)を付されるのは、おかしなことだといわれねばならない。もちろん、尊厳を付す者が、ときに見誤ったり、尊厳印を押し間違えたりすることが生じてもよいのではあるが、尊厳の付与については、あまりにもそれが頻繁である。父親の尊厳はもちろん、民族や国家、あるいは神仏ですらも、尊厳を帰すのはその関与者・信奉者に限定され、これらに与しない一般の者は、尊厳を帰すことはない。尊厳は、本来的に、これに与する者が主観的に外的に付与するものだというべきであろう。

カントは、尊厳はこれを有するものに内在的と見て、「尊厳（絶対的内的 inner な価値）」<sup>3)</sup> と言います。人間の尊厳は、理性的自律に根拠をもっており、この理性・自律は、人間に内在する固有のものであり、尊厳は、内在だというのであろう。だが、理性・自律は内在するとしても、それに至上の評価を与えるかどうかは、つまりは尊厳とするかどうかは別であり、理性の内在をもって尊厳自体を内在的とみなすことはできない。尊厳は、内在するものではなく、外的に付与する、主観的な価値づけだというべきではなかろうか。

ただしカントの「内的」という主張は、時代を先に進める主張であった。M. マイヤーは、カントの時代のヨーロッパでの「尊厳」について、「二つの尊厳概念、つまり、貴族の尊厳と人間の尊厳が、その時代の政治的修辭的な風潮の疑いえない部分であった」<sup>4)</sup> と分析している。たまたまそこに生まれたに過ぎない外的で偶然的なものとしての貴族という尊厳に対置して、ひとの内在的な理性こそに尊厳があると主張する一人がカントだったというのである。カント自身、貴族という「尊厳」の「称号」の使用は、貴族が庶民と区別されなくなるまで、当分やむをえないであろうと論じて、この時代の貴族＝尊厳をふまえた議論をしている<sup>5)</sup>。貴族の尊厳は、豪華な上着であり、やがて時代が剥ぎ取る外的な飾りであった。これに対してその上着をはぎとつても元貴族にも庶民にも残りつづけるものが「人間の尊厳」である。理性の自律は、決して剥ぎ取ることの出来ない人間に固有のものであった。万人に内在している尊厳だとカントは主張したのである。

カントのような尊厳内在説に対しては、たとえばハイラー達はこれを批判して、現代の「経験科学や社会科学」は、「人間が“生来(by nature)” 尊厳を有するということの説得的な証拠は与え得ない」<sup>6)</sup> と言うが、おそらく「社会科学」は、同一のものに対して同時に尊厳と反尊厳を付す多くの「経験」例をあげながら、外的付与説を証明することになるのではないか。貴族をかざる尊厳の上着は、人間の中身を見ず盲目的に付与されたのだが、カントのいう人間の尊厳は人の内面をしっかりと見てのものであった。だが、人間の尊厳は簡単に侵されるものでもあり、つまりは、万人のもつものではあるが、いつでも奪うことができるものとして、やはり、脱がせることのできる外的なものだというべきであろう。

R. グッディンは、dignity (尊厳) に関して、「人々の尊厳を尊ぶ respect the dignity of people」<sup>7)</sup> という言い方が一般的ではない理由を、尊厳という「尊ばれるものは、これを尊ぶ行為によって創造される」<sup>8)</sup> ことに、つまり同義の反復になることに求めている。元々から対象に内在しているのではなく、外部から別の者がこれを尊ぶことをもって始めて尊厳は創造されるということである。尊厳を有する者がではなく、尊厳をそれを感じる者たちが、外的に、尊厳という評価を付していくのが尊厳の構造だということであろう。dignity (尊厳) の対概念をなす indignity は、「侮蔑」とか、「冷遇」という意味になる。冷遇や侮蔑は、そう形容される対象に内在するものではなく、あくまでも、そう評価する者の側から発するもので、その対象に外的に付与される

ものであろう。逆の **dignity** (尊厳) も同様ということである。

日本語でいう「尊厳」も、外的に付与するものであることをその用語法において語ってくれているように思われる。われわれは「尊厳な父親」とか「尊厳になる」というような言い方を不自然とみなす。それぞれは、「尊厳を有する父親」「尊厳をもつ」と言う方を自然とする。「尊厳になる」とは、その者が尊厳自体になるということで、これに固有で内在するものに、いわばその者の属性になることを意味する。だが、尊厳は外的なもので、外的に付与される評価であり、そういう外的な評価は、「もつ」ものにとどまるということである。「尊厳な父親」という形容についても、これでは、父親に内在する本来の規定になるものを顕在化して「尊厳な」と言っているものと捉えられがちなので、その表現は不自然と感じられるのであろう。「冷厳」「峻厳」等は、「冷厳な父親」「峻厳な父親」とふつうにいう。冷たく、きびしい父親は、その冷たさ、厳しさを当人に固有のものとし、評価主体の特別の評価という感じはない。それに比して「尊厳」は、評価主体の思い入れが強いという一般的理解があって、「尊厳な父親」とは言いにくいように思うのであろう。いずれにしても、尊厳が対象自体に内在するものではなく、外的に付加される評価語であることを語っているのではなかろうか。

### 3. 尊厳は、支配関係に由来する

さて、尊厳が尊厳を有するものそのことから、外的に付与されるのだとすると、このそとの者と尊厳を有する者の関係はいかなる関係になっているのであろうか。自国は尊厳とみなされるし、自身の信仰対象には尊厳を帰すが、隣国や他宗教の信仰対象にはせいぜい敬意を表する程度で、尊厳を帰すことはまずまれであろう。尊厳を帰す自国、あるいは神仏には、どうかかわりをもっているのであろうか。

先のグッディンは、**dignity** (尊厳) の使用法の特徴をしめすために、「おぼれる子供を助ける」例を挙げて、これには、「英雄的 **heroic**」とか「高徳的 **virtuous**」と言えても、「尊厳をもつ **dignified**」とか「高貴 **noble**」は帰しにくいと述べ、「尊厳は、ひとがなすことを表すよりは、ひとがなにである(is)かを表す」<sup>9)</sup>ものになると論じている。われわれ日本語の「尊厳」でも同様であろう。個別的な行為に対する評価語ではなく、その行為主体の恒常的なあり方を評価したものになる。「尊厳を有する父親」は、個々の行為についていわれるのではなく、子供に対してその存在自体が尊厳とみなされているのである。尊厳を付与されるものと付与するもの間に成立する関係は、一回きりのものではない。一回きりでは尊厳かどうかの評価は決められない。幾度もかわるなかでの安定した評価であろう。両者は、行きずりの出会いに関係するようなものではなく、恒常的な関係にあり、組織とかシステムを構成しているのだと見なされよう。

組織・体系をなすあいだがらにあって、尊厳を有するものは、「元首の尊厳」「神仏の尊厳」というように至上の位置にあり、この評価を付与する者は、尊厳を有する「国家」や「民族」にお

いて顕著だが、これのもとに服属し、それに従う者になる。ひとつの組織体において、至上の服属させる者と、これに服属・服従するものあいだがあるということである。つまりは、尊厳は、支配・被支配関係に成立しているということになる。「支配」という言葉がきつくひびくとすると、組織を統括し指導し方向づけていく「統率」「統御」といってもよいであろうか。支配は、圧制とか搾取等のふくまれたものであるが、尊厳は、至上だとの評価である。最高の立派な統御だと被支配者たちが主観的に評価して尊厳を付与するのである。

父親の尊厳は、自分の統率・支配するその家族内に限定され、自分のこどもに対して、厳しく厳かにかかわり、こどもは、尊厳をもって評価する。なまけたり悪いことをしたら、厳しくしかる。それはわが子を思えばこそのことであり、その厳しさは尊いものである。

圧制等の否定的な評価の可能な支配であるが、尊厳の評価は、この支配・統御がみごとで立派であると被支配側からなされているのである。尊い神はこの世界を厳かに支配する（と見なされている）から、尊厳が帰される。国家は、その国民を支配するに、尊くも善をすすめ、悪を厳しく罰することに、尊厳をもつことになる。

この統率し統御する支配関係において尊厳がいわれるのだとすると、支配関係がないものには、尊厳はいわれないはずである。「自然の尊厳」とはいうが、「月の尊厳」とはいわない。自然が人間をも厳しく支配するから、その尊厳をいうのだろうし、月は、そういう関係が成立しないので、尊厳をもっては表現しないのではないか。至上のものが尊厳だとはじめに述べたが、至上でも、支配関係がないものは、尊厳とはならない。縄跳び世界一、大食い世界一等『ギネスブック』のトップの多くは、尊厳からはずれている。支配—被支配になっていないから、尊厳は言いがたいのであろう。

**（至上化、質化等の尊厳の特色が説明できる）** はじめに、尊厳について、至上化するという特徴をあげた。尊厳をもつ課長の上位には、部長や社長がいるのに、尊厳の視座は、課長を至上とみる。その理由がこの支配・被支配関係において明確になる。課長を尊厳をもって捉えるときは、課長と平社員が向かい合っており、これが支配統御と被支配の関係にあって、平社員は尊厳をもって課長を見る。そのむこうに、上に部長や社長がいても、それは、この時の支配関係の外にある。課長は支配者として相対的に至上となるのである。かつ、部長が現れたときには、これに尊厳は帰されこれが至上化して扱われる。部長は、課長や平社員を被支配者とし、ひとり、課長を含めてこれらに向かい合う。部長の背後の社長は、部長の大きな顔に隠されて見えなくなっている。さしあたり部長がひとり至上の尊厳をものとするのである。

差異を質化して尊厳と尊厳をもたない下位の存在にと峻別するのも、二分化するのも、支配関係ゆえである。支配する者と、それ以外の被支配者は、量的差異ではなく質的区別であって、まったく異なる。支配する者のみが一人、被支配者をむいてこれを統御する。尊厳とそれ以外のものの質的区別である。あるいは、一位の次に二位、三位があり、客観的には三分、四分されてし

かるべきものを、尊厳の視座は、優勝者・トップを尊厳とし、以下を敗者として一括、非尊厳にする。支配関係では、頂上の一位が支配者となって、以下に向き直って、第二位以下を支配する。一位の尊厳と、以下のものの非尊厳となる所以である。

与するもののみに対して尊厳を付与するのも、支配被支配関係ゆえであろう。自国の元首のみを尊厳と見なす。支配者に被支配者が尊厳を付与しているのである。隣国の元首に尊厳を帰さないのは、支配統御されていないからである。支配関係にはいっておれば、尊厳の視座から支配者を見る（しばしば強制される）けれども、この関係にはいっていないから客観的に評価するだけである。支配関係にある立派な支配者（と思い、思わされるもの）にのみ尊厳を付与する。父親の尊厳はその家族の中に限定される。尊厳を付すかどうかは極端に異なるのは、支配関係に入っているものと、はいっていないものの違いによるのである。

**（類比的派生的な使用）** 基本は、支配被支配関係において被支配者が支配者に尊厳を付与するのであろうが、これを外から見ている者が被支配者の立場になってその支配者を尊厳と見なすこともある。「母狐の尊厳」をわれわれはいうことができる。これは、きびしく育てられる子ぎつねの立場に身を置いて、母狐を見上げて尊厳をいつているものであろう。これは、ひとの間でも、同様である。被支配の他者に自身を重ねて、そこでの偉大な支配者に尊厳の勲章を第三者が付与するのである。この点からは、隣国の元首にもそれが真に立派であれば、かりに当国では人気が無かったとしても、尊厳を感じる。尊厳は、「立派な支配」に付与されるのを基本（ないし典型・理想型）とするが、あるいは、抽象的なものや物でも、そのかかわるもの間に支配・従属関係を見たてることができるならば、これに尊厳を付与することができる。自然の尊厳とか、学問の尊厳等がこれである。

尊厳は、さらに拡大使用される。国王の尊厳は、その子供や親族にまで拡大される。尊厳の威を借りる者も現れる。「人間の尊厳」でも最近は大規模使用が問題となっている。人間にかかわるものが幅広く尊厳とされ、その「DNAの尊厳」などが言われる。

#### 4. シラーは「支配」に尊厳を見た

尊厳を筆者は支配被支配関係のもとに見るものであるが、カントと同時代のフリードリッヒ・シラーは、その『優美と尊厳について Ueber Anmuth und Wuerde』に尊厳を論じ、これを「支配」ということに見出している。ひとの優美と尊厳を「優美は、随意的な運動の自由においてあり、尊厳は、不随意的な運動への支配 Beherrschung にある」<sup>10)</sup>と規定する。優美は、きままな動きにおいて自由自在に軽やかにあることであり、それに対して尊厳は、身体的自然における不随意的な衝動などに人間精神が厳格にかかわり支配していくことに、「道徳的な力による衝動の支配 Beherrschung」<sup>11)</sup>にあるというのである。「人間の、その衝動への支配 Herrschaft」<sup>12)</sup>が人間の尊厳を構成すると。



自然衝動に流され、食欲や性欲のコントロールに悩む人間であるが、人間の尊厳は、これを抑圧制御し支配して、自然的なものの主となることにありと見るのである。自然的なものは、崇高な人間精神に対して障害となり抵抗するものであり、これを牛耳り、この「自己の感性的なものへの精神の支配 Herrschaft」<sup>13)</sup>を構築するところに人間の尊厳があると。人間自身における自然である感覚衝動そして身体は、精神に抵抗するが、これをコントロールし、「精神が身体において支配者 Herrscher として振舞う」<sup>14)</sup>ことに尊厳があるとシラーは論じるのである。

(カント) 「人間の尊厳」を主張するカントは、尊厳を「自律 Autonomie」に見出して、「自律が、人間的な、各理性的な自然の尊厳の根拠である」<sup>15)</sup>という。理性は、自己立法し自分で自分を支配する。「人間性の尊厳は、普遍的に立法するというこの能力のうちにある。この立法が同時に自身に被支配 (unterworfen 服属) となるという制約をもつてのことである」<sup>16)</sup>と。理性は、自身で立法する「支配者 Oberhaupt」であり、かつ、これに自身が従い「被支配 unterworfen」の成員となるのである<sup>17)</sup>。

人間は、一方では、自然のもとにあつて自然法則に服している。身体あるいは、感情・衝動等は、この自然のうちにある。だが、ひとは、この自然法則・感性から独立した理性をもつ。この理性の意志をもって自由の行動をなす。自然法則に支配されての「他律」に対して、ひとは、これから独立して、理性のみにしたがった「道徳法則」の世界をもつことができる。理性の「自律」、自由の世界である。理性は、感性的なものを制御支配し、その行動を自らの意志のもとにおき支配する。カントは、感性的なもの（衝動や情欲）に対しては厳しく苛酷な支配を主張する。理性意志は、これを「拒否 Abweisung」「中断 Abbruch」「打倒する niederschlagen」<sup>18)</sup>べきだという。厳格主義である。弾圧される感性は、カントの理性を尊厳と賛美することはないであろう。尊厳は、理性の自画自賛である。シラーでは、理性的精神は、感性的衝動を打倒するよりは、これと共にあつて支配コントロールするのであろうが、カントは、これを打倒し、理性のみが純粹に自己立法していくことを求める。

(支配即尊厳で良いのか) シラーは、精神による身体・感性の「支配」そのものに尊厳をみた。カントも、理性による「支配」自身に尊厳をみていたといえる。賛美されるような立派な支配に限って尊厳をもって形容するのが、「国王の尊厳」「父親の尊厳」であつて、国家や家族の単なる支配は、苛酷で理不尽なもので暴君的なものでもありうるから、支配そのものをもってこれをただちに尊厳とすることはできないはずである。だが、シラーやカントの場合は、「支配」自体をもって尊厳を言う。

かれらが支配即尊厳としているのは、短絡的で間違いなのであろうか。支配一般を即尊厳とみなしたのだとしたら、短絡的であるが、かれらのいうのは、人間の尊厳であり、理性、精神の尊厳である。人間の理性・精神の支配である。これは、ふつうは支配自体が尊厳になるといってもよい。自然法則・感性に他律的に外的に強制されるのではなく、理性がこれを抑圧制御し、自身

の立法する普遍的な道徳法則にのみ自ら従うという自律である。この自律は、そのこと自身が尊く、第二位の猿にも到底まねのできることでなく、人間の尊厳となりうる。ただし、感性にとってはカントのような厳格主義では苛酷な支配であり、感性自身からはこれに尊厳を帰すことはできないであろう。

ひとによる「自然支配 control over nature, Kontrolle der Natur」も、支配それだけで、即尊厳とされてきた。現代では、苛酷な自然支配が問題になり、自然の搾取・暴力的支配が問題となるから、単に「自然支配」では、尊厳はいいにくくなっているが、それでも、「自然支配」即尊厳という考え方は、なお、通用している。たとえば、K.バイエルツは、現代の「技術支配 technological control」が過度に進んでいくと人間の尊厳にゆゆしき事態が生じるかも知れないというようなことを論じる場面で、人間の尊厳が「自然支配」にあることを前提として議論を展開している<sup>19)</sup>。自然や感性への理性支配においては、立派な支配がではなく支配そのものが、その構造が理性という至上のもの支配として、尊厳とみなされうる。立派な支配も、下手な支配も、人間理性の支配であり、第二位の猿とはまったく異なる営みで、最低の部類の支配でも人間の支配として尊厳のうちのこととなる。しかし、自然の搾取とみなされるような乱獲・乱開発の可能な現代では、単なる「自然支配」は、広義の尊厳のうちにあるとしても、狭義には尊厳とはいえなくなっている。

## 5. 支配とは

(制御・支配) 組織・システムをなすものは、ひとつの動きをするには、中心となるものがこれをまとめ一定の方向にと動かしていくのでなくてはならない。烏合の衆的な集合体もあるが、まとまって集団としてなにかを行うような組織をなすものは、命令する支配的なものを中心にして統一的な動きをなすのがふつうである。その中心となるものが支配的なものとなり、支配・制御をおこなう。

制御・コントロールは、これを行う者が、その対象となるものの固有の動きを周知してこれを巧みにもちいて方向付け導くことであろう。支配は、その対象について、それ自体の動きよりは、支配する者の意図を優先して、これを動かし、用立て、従わせて、その全体や支配者の意図を実現していくことであろう。全体の意図を実現するようにと支え配慮し、その被支配の各分担と享受等を配分し、全体と被支配のものを支えまとめていくのが支配である。制御（コントロール）も支配の意味で使われる言葉であるが、区別するとしたら、制御には、支配者・全体の意図を実現していくこと、被支配のものをこれに利用していくことがなくてもよい点があげられよう。

支配者と全体のために、被支配のものをまとめ統率し、これをその意図・目的のために利用し働かせて、そのはみだしには厳罰を加える等して、厳しく制御していくのが支配である。その支配が被支配側からみて、厳しいが、納得でき、みごとな統御になっていると至上の評価をされる

とき、それに尊厳が帰されるのである。

**(人間に不可欠の支配機能)** ひとの組織やシステムをなす集合体は、だいたい支配者・統率者をもつ。個人そのものが、支配的な中枢の意識を中心にして、その心身の働きを統御している。かりに中枢の意識が欠けた場合、心身はばらばらとなって、一方の足は前にすすみ、他方の足は後ろに向かうというような支離滅裂なことになり、身体はまともにはうごけなくなる。意識が統一・統制して、目標をさだめ前進を命じて、全体としての自己の心身はうまく機能していく。繊細に組織だった心身をもつ人間は、それへの高度な支配を行える中枢の意識をもたねばならない。支配・被支配は、個人に本源的な機能である。

個人の意識は、ひとつであり、その身体を支配・統御することは、その限りでは容易である。だが、この自己支配の個の集合を取りまとめることは容易ではない。ひとは、群居存在であって、この群れを組織体として統率していくことが必要であるが、各人は、そのままでは各様に意識をもって行為の目的をえがき、勝手に動いていくことになる。それをひとつにまとめて、あたかも一つの生命体であるかのような動きをしていくことができれば、その組織は、全体としてのまとまった効果的な成果をもつことが可能となる。全体を立派に統御していける支配者・統率者が求められる。

群居存在の人間は、一方では、群れに依存し帰属して一体化し安住したいという欲求をもつ。と同時に、他方には、自己を中心にして群れの他の者を利用し、これを支配したいということも大きな欲求としてもつ。競争心、権力欲、支配欲である。群れは、この帰属依存欲と、支配欲をもっていて、集団が形成されるところには、おのずから支配・被支配構造が形成される。支配・被支配関係は、人間にとり、根源的である。

近年の社会の情報化は、しかし、組織形態を大きく変容させつつある。支配・被支配の緊密な組織ではなく、ネットワークや同好会のような並列型のゆるやかなシステムをもって社会関係を結ぶことが多くなっている。家庭も父親の独裁はすくなくなり、父親が支配するという家庭は急速に消失しつつある。父親の支配のない家庭には父親の尊厳は成立しがたい。ただし、家庭では、子供に社会的存在としての教育が求められ禁止・強制が必要である。厳しさがないと強制は通用しない。厳しさのある親ということでは、親の尊厳は持続するであろう。社会も、ネットワーク型になる部分には尊厳は不要になるとしても、自分たちの拠り所とする緊密な集団・全体は存続するであろうから、そこには支配・統御や強い秩序が求められ、尊厳の持続する余地は多いにあるというべきであろう。あるいは、支配する理性とか科学等の尊厳は、いま以上のものになることもありそうである。

**(苛酷な支配では尊厳は得られない)** 支配は、苛酷で冷酷なこともある。尊厳は、支配そのものとは区別されるべきであろう。狭義には、立派な支配が、被支配者から尊厳と賛美されるのである。尊厳は、その支配が厳しくも尊いものと捉えられるのでなくてはならない。統御にそむく

ものには厳格で、全体に対するその支配者の統制、統率がみごとで、これの庇護下にあるものに加護が十分で安堵できるものであれば（そう受け取ることができれば）、「尊厳」という被支配側からの最高の勲章が支配者に付与される。

単に慈悲に満ち贈与的であるのみでは、尊厳とはならないであろう。ときには、全体の良質な統御のためには、身勝手なことをする被支配者に対しては峻厳になることも必要である。厳しくなることは、被支配者には、人気のないことになるが、全体の統御をうまくやっていくには、それも必要なことである。秩序破壊などの悪には厳しさをもち、圧倒的な威力をもって威嚇できねばならない。それを侵し抵抗することがはばかられ、かつそれが尊いこととみなされ、それに好んで拝跪できるような、そういう支配において、尊厳は、成立する。

## 6. 人間の尊厳

（自然支配と自己支配） 個人にせよ、人間にせよ、尊厳がいわれる場合は、やはり支配が問題となる。人間が尊厳を有するのは、その自然支配においてであり、さらに理性による自己支配・自律が尊厳の根拠としてあげられる。

自然支配は、人間の労働と科学技術をもって確実なものにしてきた。だが、支配を深めるほどに問題も出てきていて、自然破壊を進行させ、その支配のあり方を節度あるものにするのが求められている。自然からみて、立派といえるような支配でなくては、自然に対する暴君でしかなく、厳密には尊厳を有する支配とはいえないことになる。また、技術の進歩は人間の心身を制御し支配する技術支配の進行ももたらしており、その非人間的な科学技術至上主義は、人間の尊厳の土台を突き崩しかねないとの危惧も生じさせている。

ところで、人間の尊厳の他の尊厳とちがう大きな点は、自己支配ということであろう。各個人が自己の理性でもって自己の全般を統御し支配しているのである。他からの支配を排除して独立した自律存在となり、この理性の自律において人間の尊厳が成立している。

自律・自己支配の方からいうと、人間の尊厳は、その被支配者が自分自身になるから、自己が自己を尊厳と評価していることになる。自然支配という点では、自然からみての尊厳の付与であり、被支配の他者からの評価という普通のものになるが、自然自体が評価するわけではなく、「立派な支配のはずである」と人間が自然になりかわって判定しているのである。いわばお手盛りである。国家の尊厳にせよ神仏の尊厳にせよ、尊厳というと、われわれ人間個人自身は、被支配側で尊厳を付与するのみで、自身そういう勲章をもらう立場ではなかったが、「人間の尊厳」では、われわれ自身が尊厳の勲章をもらう側である。その評価は甘いものになりやすい。

本来、尊厳は主観的な評価であり、いくらでも手加減がきく。真に尊厳に値することになっているのか十分反省する必要がある。支配が暴君のそれになっていないか、尊厳に反する愚劣な支配になっていないか、尊厳をいただくのであれば反省していかねばならない。自分で自分は見え

にくい。他者の目を持って相互に尊厳にあたいているのかと冷静に分析することが求められる。

この他者という同じ個人同士は、相互に尊厳を確認し、これを承認しあえる。自律存在の尊厳を諸個人は相互に認め大切にしたい、できるだけその尊厳を侵さないように自律の内側には踏み込まないようにしている。だが、国家は、それら個人を被支配者として成立する巨大な支配者である。本来、個人を消耗品としつつ国家は機能しているものとして、ここでは個人の尊厳は無視されがちである。国家は、諸個人相互が人間の尊厳を侵すことがないように監視・規制しつつ、みずからもこれを最大限尊重する姿勢をもつ必要がある。個人の尊厳を擁護するのは、責任ある国家の尊厳の一部である。

(尊厳を支配の視座から見直す) 「人間の尊厳」は、生命倫理、環境倫理あるいは、教育や福祉等の倫理的場面でしばしば問題となっている。それは、人間を尊重し敬意を持って接することを求めるためのモットーのようなものになっているといえる。だが、単に理性があり自己意識があるというだけではなく、尊厳の根底には支配・被支配関係があるのだとすると、支配者でもあるという視座を加えることが必要であろう。支配者ということに注意してかかわるとすると、若干なりとも、その姿勢は改まったものとなることであろう。

福祉や医療では、いくら優しくても、自己支配を認めないものはだめだということになる。半死人に無理やりの延命をし、*dignitas* (尊厳) を有した本人の意志に相談することなく (直接対話はできないので若干やっかいな代理対話となるが…)、*miseria* (みじめ) な最期を押し付けたら、外見上幼稚化した老人を優しく幼児扱いして、自己支配者としての尊厳を傷つけるようなことには、よくよく注意しなくてはならないのである。訪問介護では、家具を勝手に動かすなどは、わずかに残された支配の尊厳を侵すことであって、してはならないのである。

環境倫理の「人間の尊厳」では、環境破壊によって人間の健康な生活が侵されていることとか、科学技術の進歩が反人間的なことをもたらし、人間の支配者としての尊厳が侵されかねない状態になっていることがまずいわれようが、同時に、支配ということでは、自然・環境の支配者としての尊厳を持つべきことが言われねばならない。はずかしくない、みごとといいうような支配・自然統御につとめる重い責務を人間はもつ。開発も生活も節度あるものにして、自然の尊厳ある支配者とならねばならない。

## 註

1) Vgl. Dieter Birnbacher: Ambiguities in the Concept of Menschenwürde. In „*Sanctity of Life and Human Dignity*“ ed. by Kurt Bayertz. Kluwer Academic Publishers. 1996. p.107ff.

2) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.IV(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*) S.294.

3) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.VII(*Metaphysik der Sitten*) S.246.

4) Michael J. Meyer: Kant's Concept of Dignity and Modern Political Thought. In „*History of European Ideas*“ Vol.8.

No.3. 1987. p.325

5) Vgl. „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.VII(Metaphysik der Sitten) S.136f.

6) Martin Hailer and Dietrich Ritschl; The General Notion of Human Dignity and the Specific Arguments in Medical Ethics. In „Sanctity of Life and Human Dignity“ ed. by Kurt Bayertz. 1996. p.103

7) Robert E. Goodin; The Political Theories of Choice and Dignity. In “*American Philosophical Quarterly*” Volume 18. No.2, April 1981. p. 97.

8) Goodin; *ibid.* p.97.

9) Goodin; *ibid.* p.96.

1 0) „*Schillers Werke Nationalausgabe*“Bd.20(Philosophische Schriften) Erster Teil. Weimar. 1962. S.297

1 1) Schiller; *ibid.* S.294

1 2) Schiller; *ibid.* S.297

1 3) Schiller; *ibid.* S.296

1 4) Schiller; *ibid.* S.296

1 5) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.IV(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*) S.294

1 6) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.IV(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*) S.299

1 7) Vgl. „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd. IV(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*) S.292

1 8) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd. V(*Kritik der praktischen Vernunft*) S.80ff.

1 9) Vgl. Kurt Bayertz; Human Dignity: Philosophical Origin and Scientific Erosion of an Idea. In „*Sanctity of Life and Human Dignity*“ed. by Kurt Bayertz. 1996. p.87f.

## **Die Würde des Menschen und des Individuums–Die Würde leitet sich vom Herrschaftsverhältnis her –** **Yoshiki KONDO**

Das Objekt, auf welches der Begriff der „Würde“ bezogen ist, wird als etwas Absolutes betrachtet. In Bezug auf die „Menschenwürde“ ist der Mensch ein absolutes Wesen und unterscheidet sich daher von den Primaten qualitativ. Biologisch gesehen besteht der Unterschied zwischen Mensch und Primaten in nur einem Prozent der DNA. Außerdem hat die Würde keine Allgemeingültigkeit, sondern wird nur von einer bestimmten Anzahl Beteiligter einer Gruppe anerkannt. Die Würde des Vaters wird daher nur innerhalb der Familie anerkannt.

Wie kann man diesen Zusammenhang erklären? Ich möchte dazu folgende Theorie aufstellen: Die Würde leitet sich ursprünglich vom Herrschaftsverhältnis her. Der Mensch dominiert in dem Herrschaftsverhältnis, in welchem er zu den Primaten, den anderen Tieren

und der Natur steht, und somit kommt ausschließlich ihm Würde zu. Innerhalb der Familie herrscht der Vater und deshalb kommt nur ihm das zu, was in diesem Sinne Würde bezeichnet.

Schiller hat die Würde als Herrschaft aufgefasst. In seiner Abhandlung „Über Anmuth und Würde“ schreibt er: „Bei der Würde also führt sich der Geist in dem Körper als Herrscher auf.“ Wahrscheinlich begriff Kant die Würde ebenfalls als Herrschaft, weil er in ihr die Autonomie erblickte, welche die Herrschaft von der Vernunft ist. Beide haben Würde unmittelbar im Zusammenhang mit Herrschaft aufgefasst. Aber meiner Meinung nach kann der Begriff der „Würde“ seine Gültigkeit nur in Bezug auf die höchste Herrschaft besitzen.

(『倫理学研究』 広島大學倫理学研究会 第16巻 1~20頁 平成17年10月)

## 第二章 「不可侵」の尊厳—尊厳は、侵される—

### 1. 「人間の尊厳」のみが侵されるのではない

尊厳というと、「神仏の尊厳」や「国家の尊厳」がまずは念頭に浮かぶ。神仏や国家は、超越的な存在として絶対的で、世俗の人間、市民からは触れ得ない高みに位置付けられたものになる。

「不可侵」である。この不可侵は、まずは、はるかな高みにあるがゆえに触れることが不可能という意味である。

これに対して、「人間の尊厳」の場合、人間にとって、触れることができない高みにあるわけではない。集団や国家もこれには十分に触れることができる。本人自身、人間存在にもとることを行なって、尊厳を傷つけることもある。こちらの「不可侵」は、触れて侵すことができるが、侵してはならないと戒めているものになる。人間の尊厳は、しばしば侵害されている。人間を残酷に虫けら扱いにした大戦を反省してドイツは、憲法（冒頭）に「人間の尊厳は不可侵である」とうたった。日本国憲法（第24条）も「個人の尊厳」を言う。個人としての人間の尊厳は、深刻な形で侵されてきたのである。いまもって、戦争や貧困は人間の尊厳を侵しつづけている。あるいは、法を犯し理性的コントロールを失い、ひとの尊厳を自らが傷つけることも日常的である。

超越的な神仏や国家の方は、はるかな高みにあって、一見、侵すことができないかのようである。だが、これらも実は人間の尊厳と同様に侵されつづけてきたのである。国家の尊厳は、領土を侵すことで侵害されてきた。隣国の国旗を焼いたり踏みこむことは簡単なことだが、その国家の尊厳は傷つく。神仏の尊厳にしても安泰ではない。信者は尊崇の気持ちをもって神仏に向かうが、一般の非信者は、尊厳の扱いをしないどころか、そんな神仏など存在していないと冒瀆する。聖なる遺骨（舍利）に対して、「仏の骨も犬の骨も差別なく尊いのでは？」と犬並のあつかいに、尊厳はいたく傷つけられる。キリスト教徒には、イエスの身につけていた神聖な衣が、無信仰の者には、「いたずら者に売りつけられた古着でないとしても、ぼろ切れが何になろう！」と汚いごみあつかいになる。ごみとして扱われることは、信者には、大変な冒瀆で尊厳がいたく侵されたことになる。尊厳をきずつけられるのは、人間の尊厳だけのことではなく、あらゆる尊厳が傷つけられ侵されるのである。

尊厳は、宗教の信仰対象のように、ごく狭い一部の者に抱かれるだけで、その部外者は、普通の扱いをする。父親の尊厳は、その家族に限定される。民族の尊厳は、その民族のうちにいる者に限定される。それらの外にいるものは、基本的に尊厳扱いはしない。インド人には聖なる牛も、イギリス人には単なる牛肉である。しかし、尊厳とみなしているものへの部外者による普通の扱いは、内部の尊厳をいただくものには、不屈きな行為であり、尊厳を傷つける行為として解釈される。尊厳は、侵されるのである。



## 2. 「侵す」とは、どういうことか

尊厳は、「不可侵」だというのが、「不可侵」とはどういうことであろうか。逆にいうと、つまりは「侵される」とは、どういう事態なのであるか。国境を「侵す」のは、国境からすこし入り込むことであり、本格的に領土を奪うことにまではいたらない場面でのことである。もちろん、深く侵して、内部まで食い込む、深い侵食にいたることもある。「侵略」は、国土の本格的な占領をいう。尊厳を「侵す」という場合、まずは、その対象の本格的な侵食をさすよりは、そうなる手前の軽く接触するレベルの侵害をさす。尊厳の対象を打倒するのも、破壊するのもなく、軽く接触するのが、「侵す」ことであり、いささかの侵害も許さないというのが、「不可侵」のさしあたりの表面的な意味である。

ドイツの憲法は人間の尊厳の「不可侵 unantastbar」をいうが、これは、「不可触」ということである。「触れて(antasten)はならない(un)」というのである。同所には尊厳を有する人権については、「unverletzlich (不可侵)」という。傷つける(verletzen)べからずということである。英語では、人間の尊厳の不可侵については inviolate を使うようだが、これは、violate(乱し、妨害、冒涇)してはいけないということである。いずれも、その侵害は、さしあたりは、対象を破壊したり打倒するようなことまではしないものであろう。傷つけるのは、深く傷つけることもあろうが、ものを「傷つける」のは、これを「壊す」のとはちがひ、軽い外傷を与える程度に留まるというのがふつうであらう。

日本語では、「触れる」と「侵す」には、ちがひがある。「触れる」とは、その対象の内部に入ることなくその表面に限定して密着することである。軽くそっと表面に接近し、すきまをあけず境界の空間をゼロにするのであり、かつ行き過ぎて圧力や痛みを感じたり表面の変化をもたらすことがないように気を使い、その存在をその表面において分かる程度にと接近を留めることである。触(さわ)ることと区別するとしたら、触(さわ)るのが、その意思をもってみずからが接触することであるのに対しては、触れるのは、対象の方から接近する場合も含むものになる。意思して触れる(さわる)ことのうち、その対象がそれをいやがり拒否しているとき、その接触は、「侵す」ものと受け取られる。

「侵す」のは、「触れる」のがその対象の表面にとどまって内部に入らず境界を越えないのに対して、これを超えて相手の方へと踏み込んでいくことである。相手の領域に入って、これを汚し傷つけることである。触れただけであっても、これを不快と思い、拒否したい場合、「侵された」と捉える。触れることで、若干とはいえ、汚されるのであり、その不快な汚染が表面から内部へ染み入ってくる感じにと過敏にその接触を受け取り、侵食されたと見るのであろう。尊厳の対象は、至上の価値ある対象であり、これに接触するわれわれは、下賤なものになる。尊厳の方からわれわれに接触するのは、「触れる」「さわる」ことだが、われわれが尊厳に「触れる」のは、下

賤なものがその接触で汚して傷つけることであり、「侵す」ことになる。

触れることは、ごく外面的な接触であり、その限りでは、そのことでその対象が深刻な打撃をうけるというようなものではない。だが尊厳は、触れたり触ったり (antasten) してはいけないと「不可侵 un-antastbar」を求める。触れること自体が「侵す」こと傷つけ汚すことであり、ほんのささいな侵害である「接触」することすらも尊厳は、許さないのである。尊厳を有するものは、尊く輝いており、触れることでその輝く表面がくもって汚れてしまうので、「近づくな、触るな」というのである。

触れることは、さしあたりは表面的なことであるが、そういう些事にとどまらないことがある。つまり、軽く触れただけであっても、そのことが尊厳自体を崩壊させることになる場合があるのである。尊厳は、超越的に至上の状態をたもっているが、下位（下賤）が触れるとは、その超越が否定されたということである。その触れる行為は、些細なことであるが、「触れる」のは、密着することであり、同等のものとして並んだということである。つまり、その些細なことで超越性は失われ、尊厳は否定されて崩壊するのである。

### 3. 何を、侵すのか

国連の「世界人権宣言」は、前文に、人間の「固有の尊厳 inherent dignity」を主張し、第一条に、人間は、「自由」であり、「尊厳と権利において平等 equal in dignity and rights」だという。自由や権利と並ぶここにいる「尊厳」の意味するものは、何なのであろうか。尊厳の内容は自由や権利に重なるものであろうが、それらと違うから区別立てをして「尊厳と権利」と並べるのである。それは、何になるのであろう。そこからは、特に指示されるものは読めない。一般的な理解として、その尊厳は、尊いもの・神聖なものといった概念に置き直されているのであろう。わが国の憲法第24条の「個人の尊厳」にしても、ドイツ憲法第一条の「人間の尊厳は不可侵である Die Würde des Menschen ist unantastbar」にしても同様である。ドイツ憲法は、つづけてその第二項には、「不可侵、不可譲の人権 unverletzliche und unveräußerliche Menschenrechte」と、これを読み替えている。だが、それだけなら、人権は、不可侵だといえればよいのであるが、そうせずに、尊厳をもって始めている。その尊厳とその不可侵とは一体なにを指すのであろう。これは必ずしも明確ではなく、各人が勝手に人間の尊厳を解釈しその適用範囲を広げることになり、ドイツの現代の「人間の尊厳」は、「不明瞭かつ多義」となって、いまや「インフレーション」を起こしているともいわれている<sup>1)</sup>。

人間の尊厳は、まだしも、「わしら父親の尊厳が回復されねばならない」という場合、「独裁的家長」の復権をいうのでないとする、その尊厳はなにをいうのであろう。焼却場建設反対のスローガンに「ワシが住みにくくなる、自然の尊厳が侵される」という場合、尊厳のなにが侵されるのであろう。尊厳において侵されるものは、いうまでもなく、「尊厳」であるが、この尊厳自体

がなにであるのかを明確にしなくては、侵されるといっても何がどう侵されるのか、あいまいにとどまる。尊厳そのものをはっきりさせておくことが肝要となっているように思われる。

筆者は、典型あるいは理想型としての尊厳は、大きくは二つの根本様態から捉えられると考える。その根本の有り方とは、その形式において、はるかな高みにあって「超越性」のあることであり、その実質において、尊厳は、支配関係に由来し、「立派な支配」に対して付与される最高の評価であり、賛美の勲章になるということである。したがって、この二つのことが不可侵において、根本的に目指されるものになるのである。

#### (超越性の侵犯)

尊厳を有するものは、形式的には、至上で比較を絶した絶対的な高みにあるものである。「課長の尊厳」は、その上に社長がいても、これを視野のそとに無視して、課長を至上・至高化してあつかう。うだつのあがらない父親も、うちでは母子をよせつけず至上・頂点となっていて尊厳をもつのである。客観的には比較可能で第二位とは僅差でトップにあるのだとしても、尊厳のあつかいは、このトップを絶対化し比較不能に仕立てる。触れて侵すことのできない「不可侵」の絶対的な高みに位置付けるのが尊厳である。

J. キーナンは、神聖さ (sanctity) で特に「絶対的不可侵 absolute inviolability」がいわれると述べる。聖なるものは、神的な領分のものであり、世俗が侵す (violate) ことは許されない。世俗を超越した聖なるものは、世俗からの接触や侵入にはきびしく対処し、これを「不可 cannot」と禁止することをもって自身の固有性を維持するのである。たとえば神のまえで誓う「結婚の神聖さ」は、神聖なものとしては、もはや世俗を超越して、世俗 (本人たち) の好き嫌いで勝手に離婚することは「禁止」されているのであり、なにがあっても離婚は「不可」ということになるのだと<sup>2)</sup>。

この事情は、「尊厳」一般にいえることであろう。尊厳印のついたものには、一指たりとも触れてはならないのである。世俗・下賤に対して、神聖なもの・尊厳なものは、これから隔離された至上の価値をもち、かつ、世俗に対して威力をもってする。若干高貴なものと若干下賤なものがあるが、前者を尊厳化するには、接触は「不可」と境界を作り囲いをつくって、区別を絶対化することである。「触れるな」「近寄るな」と「禁止則」をもって仕切って隔絶することで、これを神聖化し、尊厳化することが可能となる。極論するならば、尊厳が不可侵をつくるのではなく、不可侵が尊厳をつくるのである。尊厳は、下位の下賤とは、隔絶している。かりに客観的には僅差であっても、これを雲泥の差にする。この隔絶性・超越性は、下位のものが触れることで崩される。尊厳を侵すのは、この超越の隔絶距離をなくする行為であるにとどまらず、尊厳そのものを否定する行為となるのである。

#### (支配の侵害)

他方、その実質からみた本来的 (理想型としての) 尊厳は、私見によると、その成立の根本に

において、「支配関係」をもつ。超越的であっても、至上至高のみでは尊厳とはならない。ミス日本一という美のトップは尊厳を有さない。長時間なわとび世界の『ギネスブック』のトップも尊厳とはならない。尊厳には、みごとな支配者となっていることが必要なのである。あるいは、社長や部長が上にいても、課長が尊厳となるのは、支配関係ゆえである。つまり、課長と平社員が相対的に閉じた支配・被支配関係を形成して（この関係から社長、部長は排除されている）、平社員の尊敬をあつめて「日本一の課長」との賛美をえて、課長は尊厳をもつことになる。課長は、必ずしも客観的に高い価値を内在させていなくてもよい。部下がそう評価して賛美するなら、尊厳ということになる。逆にいくら立派な課長でも部下が運悪く尊大であったりすると、「無能な課長」と評価され尊厳は付与されることはない。尊厳は、そのものに内在しているものではなく、外的な付与によって成立する。神仏の場合、これにひれ伏す被支配者（信者）のみが尊厳を付与し賛美するのである。ひれ伏すことのない非信者は尊厳を付与することはない。国家も、国民を被支配者とし、支配するものとして尊厳を有する。父親の尊厳をいうのは、その被支配家族員に限定される。尊厳は、本来、支配関係において可能となっているのである。もちろん、これは理想型としてのことで、支配の実質がなくても、そう見たてることができるなら、主観的な価値付与のことであるから、いくらでも尊厳の適用は拡大されうる。

シラーは、いみじくも尊厳の規定を、この「支配」をもってしている。かれは、尊厳を「自己の感覚的なものへの精神の支配 Herrschaft」<sup>3)</sup> とか、「精神が身体において支配者 Herrscher としてふるまう」<sup>4)</sup> ことと述べる。シラーは、「支配」自体を尊厳とみなしているのであるが、苛酷なだけの父親や無能な国王には尊厳を帰すことはないから、厳密には、尊厳のある支配は、単なる支配にとどまらず、被支配側からみて、みごとだ、厳かで立派だと賛美されるものでなくてはならない。つまり、「立派な支配・統御」であるとの勲章を被支配側が外から付与するのが、尊厳の基本だということになる。この外的な付与によっているがために、場合によっては、尊厳のかけらもない冷酷で無能な国王であっても、被支配の国民から尊厳をもって賛美されることも可能となる。

尊厳の侵害は、この支配関係を拒否することとして成立する。支配者として承認しないということである。厳密には、尊厳を有する支配者として認めないということであるから、支配者としては認めても、その支配に尊厳との評価を与えないことで尊厳は侵されるのであり、支配の否定と、支配は侵さないが尊厳を拒否する二つのあり方が、尊厳の侵犯としてあることとなろう。後者の場合、具体的な尊厳の侵犯は、その超越性の形式を否定するか、その支配の実質の幾分かを拒否することになる。

支配の侵害は、支配者自身を侵すことには限られない。その支配の手段・対象を侵すことでも可能である。直接的には襲えないとしても、支配者の顔をなすもの、あるいは、支配の手段となるものやその被支配者・支配領域を侵すことでも、支配者自身の尊厳は十分に侵害できる。国家

の尊厳の侵害は、その国旗を踏みにじりこれを焼くだけでも可能となる。尊厳という評価はしないということがその行為において端的に示されるのである。

ところで、G.ハリスは、ひとの尊厳について、これを一方で、「生の困難と戦う、限りない強さ strength」<sup>5)</sup>に求めると共に、他方で、ひとの価値には、繊細な傷つきやすさ、「弱さ vulnerability」があり、これはこれとして、強さと対置して人間の固有のものとして尊重されるべきではないかという。「偉大な強さとともに偉大な弱さ」<sup>6)</sup>をあわせもつのが人間であり、人間の「尊厳は、弱さを含む」<sup>7)</sup>と論じる。

筆者は、超越性と立派な支配に、つまりは、ハリスのいう「強さ」に尊厳をみる。ハリスは、これに加えて、繊細さ・弱さにも人間固有の価値があると見て、これにも尊厳を帰す。だが、弱さが価値であるとしても、それを尊厳とってよいのであろうか。もしそうだとすると、強いもの（支配者）も弱いもの（被支配者）もすべて尊厳となり、尊厳は、あらゆるものに帰されて水増しされ、その語のもっていた意味を失うのではないか。その点では、ハリスの主張は、うけいれることができない。ただし、理性的な強さではない繊細な感性、人間における非合理的なものが尊厳だということになるのであれば、それは、それとして首肯できる。人は、理性的であるよりは、しばしば非合理的な感性的なものに実際には支配されている。自然の尊厳をいうように、人間の感情等感性的なもの（いわゆる内的な自然）が、あらがいがたく強力に超越性を有するかぎりにおいて、これに尊厳を帰すことは可能であろう。

#### 4. カントにおける「目的自体」「自律」としての「人間の尊厳」

尊厳を論じる場合、しばしばカントがあげられるが、かれは、国家の尊厳を侵すことについては、国家の尊厳(Würde)が権力(Gewalt 暴力)にあることを踏まえつつ、立法の尊厳では「非難不可 untadelig」、行政では「抵抗不可 unwiderstehlich」、司法では「変更不可 unabänderlich」がいわれると述べる<sup>8)</sup>。立法を誹謗中傷して貶めてみたり、行政のなすことに逆らったり、裁判で判決をないがしろにするようなことをしてはならない、つまりは、国家権力は侵してはならないと、今から見ると時代の差を感じさせる厳しい内容をもって、国家の尊厳への「不可侵」を述べる。尊厳を有する国家の支配は絶対的で超越しているのであるから、これにはいささかも触れてはならないというのであろう。

人間の尊厳については、「自律 Autonomie が、人間的な、各理性的な自然の尊厳の根拠である」<sup>9)</sup>とカントはいう。自律とは、自己の理性が、感性や身体を含む自己自身を律し支配することであり、理性存在が共同社会形成に際して理性的に「自己立法 selbstgesetzgeben, eigene Gesetzgebung」<sup>10)</sup>して「支配者 Oberhaupt」となり、かつこの法に自身したがう「被支配 unterworfen」の成員となることである<sup>11)</sup>。自律は、他律の反対つまり他に支配・強制されることのない自己支配の「自由」であって、これが人間の尊厳を形成するというのである。尊厳を「支

配」のもとに捉えているとあってよいであろう。個人の自由・自律は、しばしば国家等の全体からの強制をもって侵され、国連や各国の憲法がその不可侵をうたっているわけだが、カントの場合は、そのことよりは、理性支配に対する感性からの侵害が問題であった。ひとの尊厳がそこなわれるのは、理性的なはずの人間がおのれの感性に屈することにあつた。

他方、カントは、人間の尊厳の至高・超越性については、これを「目的自体」の規定において捉えているということが出来る。自己と他者の人格のうちの人間性を「常に同時に目的として使用し、決して単なる手段としてのみ使用しないように行為せよ」<sup>12)</sup> といい、人間は、究極の「目的自体 Zweck an sich」<sup>13)</sup> 「絶対的価値」<sup>13)</sup> として尊厳を有するのだとみる。しかし、尊厳を有するからといって、ひとを常に目的としておくことはできない。手段としてあつかうことも生じる。手段とするということは、これの至上性・超越性を否定することであり、尊厳を侵すことになる。このため、カントは、「手段としてのみ」あつかってはいけない、目的としてもあつかうべきだという。

では、手段としてのみの使用はだめだとカントがいうとき、いかなる方法で手段が目的としてもあつかえるのであろうか。「虚偽の約束」をするという例を挙げているところで、この点について、つぎのように述べている。虚偽の約束は、相手を手段として利用するだけである。そのだまされる人は、この虚偽の約束自体を「自身における目的に含む」わけにいかない、だます意図に「同調する einstimmen」<sup>14)</sup> わけにはいかない。つまり、逆に肯定される場合はというと、手段となることについて、そのことを自身の「目的」にし、それに「同調・同意」でき、自己決定して自発性が保たれるときということになろう。手段となる無償労働の場合、強制の奴隷労働では、当人の「同意」はなく軽作業であっても尊厳を奪われた惨めなものになるが、自発性からなるボランティアであれば、無償の重労働であっても、尊厳にみちた活動になるわけである。

カントは、この目的と手段に関しては、こうも言っている。「私は、各目的のための手段の使用における私の格率を、各主体にとっての法則、その格率の普遍妥当性の条件のもとにと制限すべきである」<sup>15)</sup> と。「各主体にとっての法則 ein Gesetz für jedes Subjekt」とは、手段となる者自身が自己自身で法則と認めることで、したがって、自律的で自発性をもって納得できている場合ということであろう。さらにここでは、「普遍妥当性 Allgemeingültigkeit」をもつならよいとする。えこひいきなく普遍的に理性的に考えて、手段とすることが許容されるならば、それは、尊厳を侵すものではないということであろう。どんな立場の誰が考えても、手段となり犠牲になるのが相当だ、正当だということなら、犠牲になる個人の理性も、これに納得するはずである。(手段となる者の) 理性の納得があれば、その理性自身決定に参加しているのである(手段への「同意」があっても尊厳の侵されることがあり—たとえば、自発的な売春や自発的な犯罪加担—「普遍妥当性」は、人間的尊厳にとって不可欠といえよう)。

エゴイストは、他人の犠牲になろうとはしない。その感情を尊重するには限度がある。この限

度を越えたところでは、理性の「法則」を提示ししづしづの自律・自発性を求めるか、それでも納得しないなら、えこひいきのない理性的熟慮のもと「普遍妥当性」をふまえて強制するとよいということになるだろうか。それで、個人の我意の尊重は中断されたとしても、その人間的理性の尊厳は守られているのである。

カントの人間の尊厳は、一方では、その尊厳の超越性を「目的自体」としていい、他方で、自律の規定において理性的な支配者の尊厳を言っていると解釈できる。尊厳（したがってその侵犯）を、超越性と支配について見ているとあってよいであろう。

## 5. どのように侵すのか

尊厳が侵害される場合、その超越性や支配が否定されることになるが、これを侵す者の方からいうと、その侵犯は、大きくは外からのものと内部からのものに区別される。神仏の侵害は、基本的には外からなされる。その外のもの多くは侵害しているつもりはないのだが、結果的に侵害しているものと受け取られる。尊厳を有する神であったとしても、これを信仰していないものには尊厳でもなんでもない。部外者のふつうにする、賤しめるつもりのない無関心の態度も、内部のものには、その支配の無視として尊厳そのものの否定である。単に触れただけのことが超越性の無視として尊厳を侵し傷つけることになる。

国家や民族についても同様である。その国家に属するものには、外国のささいな、尊厳を侵すつもりのない並のあつかいでも、ときに、これを侵した行為とみなされる。野卑で無知な元首であっても、当の国では、尊厳(dignity)を有するあつかいになる。だが、隣国は、客観的に、無知蒙昧ととらえ侮蔑(indignity)のあつかいをする。そういう冷静な扱いは、当の尊厳を帰している国民にとっては、元首の尊厳の侵害と映る。

尊厳は、支配関係のうちにある被支配者がその支配者のみごとな統御・支配について、これを尊厳と賛美する（しばしば強要される）のが本来的なものであろう。父親の尊厳は、その被支配の家族内に限定される。国家元首の尊厳は、その被支配の国民に限定された賛美の付与である。被支配とならないその組織のそとのものは、これらに尊厳を付与することは（そうしてもさしつかえないが）、あまりない。課長の尊厳はその課の内部に限定されたものである。そとには通用しない。比較不可能の絶対的価値の尊厳は、外部とのかかわりでは、客観的に相対化して比較可能とされ、したがって尊厳の視座は取り外されふつうのあつかいとなる。外部では、尊厳は、侵されるのがふつうのことだと言うことができる。

尊厳の侵害は、外部からは必ずしも意図的になされるものではないが、内部から侵す場合は、しばしば意図してこれをなすものとなる。カントに言われるまでもなく、われわれは、おのれのふがいなさを十分に自覚しつつ、感性的欲望（食欲）に負けてその理性的尊厳を侵す。組織の内では、現に尊厳との評価をしていて、それを意識して日頃かかわりをもっているのであり、尊厳

を侵すのか否かについては、十分注意し自覚をもつての決断となることが多い。

尊厳は、その組織の頂点にある支配者に帰される。第二位以下は被支配となって、一括して非尊厳の方に入れられる。しかし、客観的には、僅差をもって第二位がひかえている。仮に、その至上の第一位がいなくなったら、この第二位の者がその頂点にたち、以下の者の方に向き直って、唯一の支配者として、尊厳の称号をもらうことになる。尊厳あつかいの社長のすぐ下には、非尊厳あつかいの、しかし、実力ではすでに社長を超えてさえいる部長がいる。実力トップの部長は、会社全体から付与される尊厳の勲章をつけるためには、あとは、社長を追い出すだけである。

神と人間でも同様である。人間と、尊厳を有する神は、雲泥の差をもって峻別され、神は不可侵であった。だが、超越神をいう宗教であっても、その神の内容は、圧倒的に人間の有する優秀なものとも一致する。ましてや多神教の神など昨日まで人間であったものが祭りあげられているのである。神に接して人間は第二位に非尊厳をかこっているが、神がいなければ即、人間は、第一位となり、支配者として尊厳の存在となれる。中世のたそがれ、神が無限だということに並べて人間も無限だという主張をして、神の尊厳を侵しはじめ、やがて、尊厳をもつ神をひきずりおろして、近代の人間の尊厳が成立した。尊厳を獲得した人間は、第二位の猿をおりに入れて賤しめ、これをよせつけない。だが、遺伝子レベルでいうと1パーセントの違いでしかないという。

尊厳の侵害は、トップ直下の上位のものがするのみではない。下層のものもする。ただし、その意図は別である。多くの場合、それは、ささやかな自己の私利である。国家でいえば、現実の尊厳をもった支配体制の秩序・法について、これを侵し違反して、私利を優先しようというのである。この場合、尊厳を侵すつもりはない。私利を思ってそのささいな違反を行うのである。それが、結果的には国家の法秩序を侵し、その尊厳を侵すのである。しかし、下層からの尊厳の侵犯のなかには、ときに、支配の転覆、革命となるものがある。

## 6. 侵犯の正当と不当

尊厳を有する者は、自分たちが支配者であることを明確に示すために、外見からして尊厳を装うことがある。被支配者とちがうことを明示するため、その外見は、被支配の下賤にはまねのできない、豪華・華美の形式をとる。M. マイヤーは、「尊厳dignity」が、かつては高い価値をもつ宝石等で豪華に飾った状態を示すものであったり、さらには高い社会的地位、貴族そのものを指していたこと等論じている<sup>16)</sup>。厳かで侵しがたい威力をもつての支配は、被支配の全体がスムーズに機能することを思っているものであるが、この支配は支配者自身の利益のためになされることもしばしばである。ここでは支配は、搾取・抑圧になる。貴族や国王の荘厳は、国民の富みをそこに吸い上げ集中することにおいて可能となる。

こういう状態に対しては、人間の本源的な平等を主張する者は、尊厳の侵犯を正当化することになるであろう。国王や貴族の尊厳(dignitas)は、国民の悲惨(miseria)によって可能となっ



ているのであり、尊厳のその豪華な部分は、国民の富みを収奪した部分であって、それこそが国民の悲惨さの原因であるとみなされる。ブルボン王朝の豪華絢爛は、フランス国民の悲惨の原因であって、国民の悲惨克服には、国王や貴族の尊厳を侵しこれを国民に奪い返すことが、つまりは革命が必要であると、尊厳の侵犯は正当化される。

フォイエルバッハは、神の尊厳の秘密をこういう形で捉えた。尊厳を有する神の豊かさは、ひとの類的な諸力をそこに疎外し外化したものであり、これを今や人間にとりもどさねばならない。中世の「神の尊厳」に対し、近世は「人間の尊厳」を対置する。これをフォイエルバッハ的のいうと、人類は、まずは、自分自身の本質を外的に疎外して神として見出し、そこに知性等の類的な力を、つまり尊厳を有するものを神のものとして立てたのであり、「神を富ませるために、人間は貧しくならねばならず、神がすべてであるためには、人間は無となる」<sup>17)</sup>のであった。神に尊厳が帰されるほどに、人間にはなにも残らず悲惨なものとなった。「貧しい人間のみが、豊かな神をもつ」<sup>18)</sup>のである。「神は全能で、人間は、無力であり、神は神聖で、人間は罪深い」<sup>19)</sup>こととなってしまった。いまや、神の尊厳となっている本来的には人の類的な尊厳を、人間自身のもので取り返して、人間の尊厳としなくてはならないとフォイエルバッハは主張する。

このフォイエルバッハの宗教批判は、マルクスにおいて、現実の経済的生活の批判にと敷衍された。マルクスは、「労働者の疎外」を指摘してつぎのようにいう、「かれ（労働者）が価値を創造するほどに、かれは、無価値になり、非尊厳的なもの(unwürdiger)になり…労働がより力有るものになるほどに、労働者は無力になっていく」<sup>20)</sup>と。資本家の私的所有となっている富みは、その尊厳は、労働者を搾取し悲惨とすることによって成り立っているのであり、その富み・尊厳を奪い返し、「労働者と労働に、その人間的使命と尊厳 (menschliche Bestimmung und Würde) を獲得」<sup>21)</sup>することをもって、収奪者を収奪しなくてはならないと、革命を主張したのであった。

無政府主義者なら、次のようにいっだろう。国家の尊厳は、国民の富み・尊厳＝価値あるものを国家が収奪・剥奪して成立しているのであり、国民の悲惨は、国家に収奪され抑圧されていることにある。この国家の尊厳を奪い、これを国民に取り返し、国家を消滅しなくてはならない。国家をなくして、人間の尊厳が真に確立されると。

支配するものの尊厳と被支配の悲惨の関係では、たしかに被支配者を収奪し悲惨化することで、その分が支配側の尊厳分となっている場合がある。だが、他方、ことの始めに被支配側の悲惨があり、これを救わんとして、豊かな価値を有した支配者が登場し、尊厳をもった贈与・献身をするという場合もある。われわれの一部の仏や菩薩は、有情の悲惨をみて、自己そのものを贈与する希有の存在として現れた。贈与型の尊厳をもったものである。支配的なものとなっている理性や科学の尊厳は、無知で悲惨な人間への知や力の贈与においてある。今日の国家や父親の尊厳も、過半は、この贈与型の尊厳になるのではないか。贈与型の支配は、その被支配側から、当然的に尊厳をもって受け入れられる。しかし、支配欲の強い者や外部のものは、これをも侵すことであ

ろう。この贈与型の尊厳への侵犯は、不当であり、不可侵が強調されてしかるべきである。

## 7. なぜ、「不可」侵と禁止則にするのか

尊厳を有するものに対するとき、「不可侵 inviolate, unantastbar」という。侵害(violate)不可(in)、接触(antastbar)不可(un)と禁止則にするが、これは、尊厳の本来的な規定からくることである。尊厳は、支配的なものについて言い、それは被支配側からいうと至上であり至高であって超越的になっている。両者は、尊厳と非尊厳として、分離され異質のものとして遠い距離をもつ。近接しておれば、上位にあるものに触ることができる。だが、遠くに隔たっているものには、触れることができない。「不可侵」は、まずは、このことの確認である。高嶺の花であり、触ることなど不可能ときまっているのだから、無駄な努力はやめる方がかしこいと禁止則をいっているのである。かりに、触れうるとしても、その威力は圧倒的で、侵害への報復は苛酷なものになるから、侵すべきではない、とんでもない懲罰がまっているから、これを肝に銘じて侵してはならないと「不可侵」をいう場合もある。

尊厳の側からいうと、尊厳維持の基本は超越距離の確保にあるから、いわば威嚇的に「触るな」「触れるな」「近づくな」と禁止を命じなくてはならないのである。僅差にあるものも被支配の側へと排除しなくてはならない。尊厳を有する支配者は、なにかにつけて、被支配側とのちがいをはっきりさせようと試みる。豪華に飾るのがそれであり、おごそかな仰々しい儀式をもってするのもそれである。「不可侵」は、その最たるものであり、かつこの禁止こそは、超越的な尊厳そのものを可能とするのである。被支配の者は、遠くに控えるべきで、近接の感覚機関（触覚）が働く距離になってはいけなさと突き放して、みずからの尊厳を確立する。肝心なのは、被支配側の態度である。支配的な（と見たてられる）ものがどうであろうと、これに触れることを遠慮し「不可侵」のタブーを自らに課すなら、白蛇であろうと狐であろうと、どんなものでも尊厳となる。不可侵の禁止則は、尊厳を創造する打ち出の小槌である。

「侵すべからず」と禁止するのは、一般にそれへの欲望が大きいことが他方にはある。食ることが禁止されるのは、食べたいからである。食欲不振の者には、「食べるな」という必要はない。尊厳について「不可侵」の禁止を挙げるのは、つまりは、これを「侵したい」との欲望がひとにおいては大きいということである。現に、どんな尊厳も、しばしば侵されている。尊厳は、至上の価値あるものである。これを価値と見なす者の求めてやまないものである。あるいは、被支配者の欲望充足には、支配者の秩序は束縛となるから、これを破ろうとすることもある。

しかし、いくら大きな欲望があったとしても、その実現が絶対に不可能な場合は、禁止することは不要である。禁止しなくても、これを破ることはない。「音よりも速く走りたい」と強い欲望をもっているマラソン選手がいることを知って、そんなに速く走っては衝撃波で沿道に重大な問題が生じるので「スパート時も音速を超えてはならない」という禁止条項を設けるべきかと心配

することは出来ない。そんな夢は、現代人には実現不可能だからである。尊厳を有するものを「侵す」ことが禁止されるのは、それが非尊厳の側から侵すことが可能だからでもある。強い欲望があり、しかも、その実現が可能だから、禁止をうたう必要があるのである。尊厳扱いしない外部のものは、なみの扱い以上には、これに触れることを遠慮しない。

支配関係の内部にある被支配のものも、その上層部は支配者と本当は近接している。隔絶した距離にあるのだとしたら、「触るな」という必要がない。離れて座っているものに「触るな」と文句をつけることは、暴力団員にもできないことである。となりに並んで座っているものに対してのみ、肩がさわる、足にふれた「離れろ」「触れるな」と不可侵をいえるのである。非尊厳にされている第二位は、尊厳のすぐそばに接近して控えている。僅差で被支配に甘んじているのであり、侵犯し支配を転覆することは大いに可能である。神の尊厳は、これに近接していた人間に侵された。現代では人間の尊厳が支配的である。

## 8. 人間の尊厳の侵犯

ひとは、自己支配（自律）と自然支配をもって他の自然から超越した存在として、尊厳を有している。しかし、ひとの尊厳は、不可侵といいながら、侵されるものの代表になるぐらいに冒濫され傷つけられてきた。ひとは、至上・至高のものとして、カントは、これを究極のもの「目的自体」と規定したが、国家等からは、「虫けら」あつかいであった。ひとの生命は戦争では消耗品あつかいである。二つの大戦をへて、われわれの時代は、人間の尊厳を肝に銘じているが、この「尊厳」を「悲惨」に塗り替える戦争・抗争は、なお、やむことがない。また、人間の虫けら扱いは、依然として貧困において顕著である。現代は、豊かな時代であるが、富の偏在は、貧困を悲惨な形で残しつつけている。とくに貧困地域では、ひとは、人間らしい至上・至高のあつかいをうけていない。その尊厳は、侵されている。富みの分配は、どうにでもできる。無制限の競争をして最終勝者のみに富みが集中するようにもできる。生産と分配がより多くのものの尊厳の可能となる仕方でなされるかどうか、それは、これを自由にできる先進諸国と貧困地域のリーダーに課せられた重い責務に属する。

人間の尊厳における「支配」ということに関しては、尊厳の侵犯は、自律つまり自己支配が他人や国家等外から妨害されることに端的である。国家が人を従わせること自体をもって即自由が侵され尊厳が侵されるというのではない。個人としての人間が国家等の全体の支配にしたがうことは、全体に依存して生きるものには必要なことである。問題は、そのとき、国家が個人の内部にまで入り込んで、その自律に干渉し、合理性をもった自由までをうばうのかどうかである。この自由を尊重するならば、国家は、人間の個人的尊厳に配慮しているのである。もちろん、人間の尊厳を侵すのは、個人や集団でもあり（自らが人間にもとることを行なってその尊厳を傷つける場合も含め）、国家は、全体を支配する権力として、これらをただし、人間の尊厳の擁護にと積

極的にかかわっていくべきでもある。

自然支配ということでは、人類が至上の高みから責任を持ってこれを支配・制御できているのかどうかを問わねばならない。その支配が、自然を収奪し、これを破壊しているのだとすると、尊厳を有する優れた支配とはいえず、自然への尊大な暴君になって自らがその尊厳を傷つけているのである。ひとは、この点からは、欲望肥大を野放しにして自然（と自己の身体）を破壊して自分の首をもしめるような生き方は停止しなくてはならない。自然への節度ある関わり方をし、自身に節制を求めるささやかな生き方をしてこそ、尊厳である。

ところで、尊厳は、もともと外的な評価であって、人間の尊厳も、生来ひとに内在しているわけではない。尊厳を付与することも拒否することも可能である。尊厳(dignity)扱いもできるし、逆に侮蔑(indignity)扱いもできる。では、ひとの尊厳について、これを否定すること、つまりは、その侵犯が正当化される場合は、どういうときになるのであろうか。

尊厳の基本特徴の一つ「超越性」は、ひとを客観的に評価する場面では、かなり侵されるものとなる。人間の尊厳は、絶対的価値として比較不可能だというのが、必要に迫られてやむなく、客観的で合理的な見方のもと相対化し比較をすることになって、尊厳扱いを停止し、いうなら尊厳を侵したあつかいをする。課長の尊厳は、「日本一の課長」であっても、社長や部長の前では停止しなくてはならない。人事査定では、比較不可能の絶対的価値といっておれず、課長を、どの程度「至高」で優秀なのかと客観的に評価することになる。

他方、尊厳を構成する「立派な支配」ということでは、立派かどうかは、一層主観的であって、とくに外部からは、その支配者が尊厳を自称しても必ずしもそう扱われず、尊厳は侵されがちとなる。利己主義者の尊厳が尊大でしかないとすれば、無能の支配者への尊厳（の強要）を拒否するように、それも否定して当然であろう。尊厳どころか侮蔑を帰し、ときには刑罰をもって応答することになる。もちろん、いくら無法ぶりがひどくても、犬猫のあつかいは許されない。その理性を問いただし、その良心の自己裁判をうながし、かりに死を持って報いるとしても、害獣の薬殺などちがひ、尊厳をふまえ死刑をもって丁重な扱いをしなくてはならない。身勝手の自由は、自律の自由からは相当に逸脱しているが、自由（自己支配）の重みを示すものとして、可能なだけ、これを侵すことも回避すべきである。だが、こどもや自律的な理性判断の機能しなくなった老人等に自律は期待できない。その尊厳の形式は侵す。しかし、それは、ひとの尊厳を育て、これを支え維持するためのことであって、やむをえない形式的な侵犯にならうか。

医療の場面では、無意味な延命を拒否する尊厳死がいはれるが、この尊厳も侵されることが多い。死を確定する医療操作になるとしたら、その尊厳を守るよりは生命の尊厳を守る方に傾きがちとなるのは理解できる。輸血や癌の手術などになると、これを拒否する信念が強固な場合、逆にその自律的尊厳の侵犯をためらうが、それで助かる命が助からないのであれば、他方では、救命を使命とする者は、当然この非合理の尊厳を侵す方にも誘われることであろう。

尊厳は、絶対的価値という評価であるが、価値はそれに関与する主体の構成するもので、それに絶対的価値を認め尊厳とまでするかどうかは、しばしば当の社会や個人の価値観の問題となる。部外者は、絶対（尊厳）化せず客観的に相対化し比較可能として普通の扱いをする。あるいは、複数の尊厳（絶対的価値）が対立する場合においては、すでに事柄は相対化されており、それにしたがって、尊厳（視）を停止し、客観的に捉えて比較していく以外ない。不可侵の尊厳ではあるが、合理性のある並の扱いをもって時にこれが侵されるのは、多様な価値観の並び立つ現代社会ではことに、やむを得ないものがあるというべきであろう。

#### 註

- 1) Dieter Birnbacher: Ambiguities in the Concept of Menschenwürde. In „*Sanctity of Life and Human Dignity*“ ed. by Kurt Bayertz. Kluwer Academic Publishers. 1996. p.107
- 2) cf. James F. Keenan, S.J. ; The Concept of Sanctity of Life and Its Use in Contemporary Bioethical Discussion. In “*Sanctity of Life and Human Dignity*” ed. by K. Bayertz. Kluwer Academic Publishers. 1996. p.3
- 3) „*Schillers Werke Nationalausgabe*“ Bd.20(Philosophische Schriften) Erster Teil. Weimar. 1962. S.296
- 4) Schiller; *ibid.* S.296
- 5) George W. Harris; “*Dignity and Vulnerability Strength and Quality of Character*”. University of California Press. 1997. p.1.
- 6) Harris; *ibid.* p.131
- 7) Harris; *ibid.* p.67
- 8) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.VII(Die Metaphysik der Sitten) S.122f.
- 9) „*Immanuel Kants Werke*“ hrsg. von E.Cassirer. Bd.IV(Grundlegung zur Metaphysik der Sitten) S.294
- 1 0) Kant; *ibid.* S.290, S.297
- 1 1) Kant; *ibid.* S.292
- 1 2) Kant; *ibid.* S.287
- 1 3) Kant; *ibid.* S.287
- 1 4) cf. Kant; *ibid.* S.288
- 1 5) Kant; *ibid.* S.296
- 1 6) cf. Michael J. Meyer; Kant’s Concept of Dignity and Modern Political Thought. In “*History of European Ideas*”. Vol.8. No.3. 1987. p.325f.
- 1 7) „*Ludwig Feuerbach Gesammelte Werke*“ Akademie-Verlag. Berlin. Bd.5(Das Wesen des Christentums) S.65.
- 1 8) Feuerbach; *ibid.* S.148
- 1 9) Feuerbach; *ibid.* S.75
- 2 0) „*Karl Marx Friedrich Engels Werke*“ Ergänzungsband. Schriften bis 1844. Erster Teil . S.513

## **Die unantastbare Würde – Trotzdem wird die Würde verletzt**

**Yoshiki KONDO**

Die Würde : anscheinend kann die Würde, zum Beispiel, die des Gottes oder des Staates nicht angetastet werden. Im Gegenteil dazu wird die Würde des Menschen offensichtlich häufig angetastet. Die Würde des Gottes wird, in der Wirklichkeit, doch oft verletzt, indem die Ungläubigen vor Gott keine Achtung haben. In der Tat ist jede Art von Würde doch antastbar.

Was ist dann die Konzeption der „Untastbarkeit“ oder der „Würde“ ? Nach meiner Meinung wird die Würde von zwei wichtigen Momenten, dem der Transzendenz und dem der absoluten und perfekten Herrschaft gebildet. Die Würde ist am höchsten und hat die Transzendenz und unterscheidet sich vom Nicht-Würdigen streng. Aber in der Wirklichkeit positioniert sich der Nicht-Würdige direkt hinter dem Herrschenden, dem Würdigen, und es besteht stets die Gefahr, dass die Würde der Würdigen von dem Nicht-Würdigen einfach angetastet wird. Daher macht der Würdige den Abstand gegenüber dem Nicht-Würdigen bewusst und imperativisch, damit seine Würde nicht angetastet werden kann – also damit seine Würde würdig bleiben kann. Wegen der Vernichtung dieser Distanz muss die antastende Haltung als die Vernichtung der Transzendenz, also der Würde selbst angesehen werden.

In dem Herrschaftsverhältnis werden der niedrige Unterworfene und der würdige Herrscher himmelweit streng voneinander unterschieden. Aber beide stehen, objektiv betrachtet, eigentlich in nächster Nähe. Der zur Unterwerfung gezwungene Zweitstärkste kann besonders die Würde des Herrschers, des Stärksten, mühelos antasten. Außerdem können die „Außenseiter“ die Würde des Stärksten in einer Gesellschaft besonders einfach antasten, weil eine solche Würde ihnen, die nicht unter der Herrschaft des Stärksten stehen, gleichgültig ist. Daher ist es möglich, dass die Würde mannigfaltig angetastet wird.

Oft ist es der Fall, dass die Erhaltung der Quasi-Würde des Herrschers die Unzufriedenheit und die Tragödie des Unterworfenen verursacht. In einem solchen Fall ist der Unterworfene berechtigt, den Widerstand gegen den Herrscher zu leisten, um seine Unzufriedenheit wegzuwischen und die Tragödie zu mildern. Aber die Verletzung gegen die

absolute und perfekte Herrschaft ist zweifellos ungerecht.

(『広島大学大学院文学研究科論集』第65巻 21~36頁 平成17年12月)

### 第三章 尊<sup>きび</sup>嚴<sup>いか</sup>の嚴<sup>おごそ</sup>しさ嚴<sup>おごそ</sup>めしさ－嚴<sup>おごそ</sup>かなものへの拝跪

(本章は、この章の後の(補)英文論文とほぼ同じで、本論文集において初出となる)

(レジュメ)

- 1) 尊嚴は、そう形容されるトップのものを二位以下と絶対的に区別して、至高のものを見なす。
- 2) 至高でも、ミスワールドのように、尊嚴とならないものがある。尊嚴は、トップであると同時に支配関係のものと支配的なものでなくてはならない。本来的に尊嚴は、被支配のものが自分たちの支配者に付与するもので、これを最高の支配だと評価したものである。父を尊嚴とするのは、その家族のみであり、社長を尊嚴とするのも、その組織の被支配者のみである。
- 3) 尊嚴を有する支配は、国家の尊嚴のように、厳格さ・厳しさがある。さらには、非尊嚴の被支配者と異質で不可侵の高みにあって、嚴かで、莊嚴なものでもある。
- 4) この尊嚴をもつものへの態度に「尊敬」がある。かつては慎ましやかに神や王に対して拝跪していた。現代でも、生命や人間の尊嚴等のまえて、批判精神を麻痺させ精神的には拝跪する態度をとる。
- 5) 尊嚴を有するものは頼りになるものとして、これの傘下に属すことを被支配者は、好ましいことと思ひ、そこに安堵し、その傘下の一員であることを誇らしく思っている。

#### 1. 尊さ・崇高さ

「尊嚴」は、日本語では、「尊」と「嚴」からなり、尊く嚴しいものということである。「尊い」ものは、優れた価値がある崇高なものであり、「嚴しい」とは、その尊嚴をもつものが、やさしいのではなく、荒々しく容赦がないということである。かつ、尊嚴の尊は、「尊ぶ」ということで、尊嚴をもつものを尊び尊敬する尊嚴への態度を同時に指し示しているとも見ることができる。以下に、まず、尊く崇高で、嚴しいという尊嚴自体の特性を見、さらにこの尊嚴への態度・振るまいとしての尊敬・拝跪といったことをみていきたいと思う。

「尊嚴」の特性は、ひとつには、漢字の「尊」に示されるように、尊く崇高なものからなる。高い価値が尊嚴をもつものには想定される。その高い価値は、単に相対的に高いという評価ではない。尊嚴は、至上・至高の価値があるという評価である。尊嚴をもつ神は、無比の高みにある絶対的な価値とみなされる。カントは、尊嚴について、「無条件的で比較を絶した価値」<sup>1)</sup>つまり絶対的価値と規定する。たしかに、尊嚴という扱いは、相対比較を拒否して絶対的な超越性をもったものという扱いである。「人間の尊嚴」は、人間を絶対的とし、不可侵の扱いをすることを要求する。課長を尊嚴とみなす平社員は、その上の社長をも考慮のそとにおいて、課長を「世界一の課長」と見なして至上化し絶対化する。



量的な差をもって比較されうるものでも、そのトップのみを尊厳として、二位以下はすべて敗者・下賤あつかいとなって非尊厳とされる。組織では、トップ以下に序列があるが、その組織全体としては、そのトップのみを尊厳とし、第二位以下をこれから排除する。僅差のものも雲泥の差にし、質的区別をもってあつかうのが尊厳におけるものの見方である。尊厳をもつ絶対的なものと、それ以外の非尊厳のものという峻別である。「人間の尊厳」は、第二位の猿を下賤な非尊厳の方に突き放し峻別する。第一位の人間のみを尊厳とし、これだけは侵してはならないと不可侵をもとめ、第二位の猿を檻に入れてなぐさみものとする。だが、この人間も神の前では、非尊厳となる。虫けら扱いとなる。尊厳は、これを尊び絶対的価値と評価する者が、トップのものを至上化し、それ以下のものを非尊厳と見なすことで可能となる。

尊厳は、そう評価されるものに内在すると言われることもある。たとえば、カントは、「尊厳(絶対的内的価値)」<sup>2)</sup>と言った。だが、そうではなく、評価するものが外的に付与するものと見なされるべきであろう。同じ優秀な課長が、謙譲に富む平社員を部下にした年は、尊厳(dignity)をもつ世界の課長とみなされ、不遜な平社員が部下になったとたんに、無能の課長として侮蔑(indignity)の扱いとなる。課長のうえに位置する社長や部長は、当然、課長を尊厳とはしないし、社外の者は誰一人尊厳あつかいしない。つまりは、その尊厳と見なされるもの自体が尊厳を内在させているわけではないということである。

尊厳は、至高のもので絶対的で不可侵だといいいながら、意外に侵されることが多いのは、この主観的な外的付与によるものだからである。至高で比較不能・絶対的と評価するのだが、そのそこには、同様に評価されるものがある。これが並ぶとき、その絶対性は、並ぶというだけで相対化されて、成立しなくなる。植物人間化しつつある老人の「生命の尊厳」か「人間の尊厳」かの二者択一の場では、いずれかの尊厳は侵されることになる。課長の尊厳は、社長が現れたところでは停止しなくてはならない。主観的に最高としているのみであり、客観的には、その上があったり、すぐ下には僅差で第二位がひかえているとすれば、その場の一位のみを絶対とすることには限界がある。相対化し客観的に量的差異をもって評価すべきことになれば、不可侵の尊厳という主観的な評価は、席をゆずる以外ない。

## 2. 支配関係としての尊厳

尊厳を有するものは、不可侵である。尊い至上のものだから、ということであるが、同時に、もともとこれが威力ある支配的なものであるから、侵せないし、侵すと報復は手厳しいから、侵さない方がよいということでもあった。尊厳は、われわれの漢字では、尊く、かつ厳しく厳かなものとしての「尊」「厳」である。尊さとともに、他方には、これは厳しく厳かだと「尊厳」は語っている。

尊厳は、「厳しい」ものである。それは、尊厳を有するものが支配者としてあることに由来する。

尊厳は、私見によると、本来的には、支配関係のもとに成立する。尊厳を付与するものと尊厳を付与されるものは、被支配・支配の関係にある。神を尊厳とするのは、(その神を支配者とする)信者のみである。父親を尊厳と評価するのは、その被支配家族のみである。尊厳は、至上・至高だが、単にそうであるのみでは尊厳とはならない。ミス世界一は、尊厳をもたない。『ギネスブック』の多くの世界一も尊厳をもつものは少ない。支配関係をもっていないからであろう。支配関係にある被支配者が、その支配者とその支配のあり方を立派で尊いと賛美するのが尊厳という評価である。

さきの課長が、うえに社長がありながら尊厳をもつのも、支配関係ゆえである。平社員と課長が支配・被支配関係をもって、相対的に閉じたものとなっているからである。僅差にあるものにおいて、トップのみを尊厳として、以下を峻別し質的区別にするのも、支配関係ゆえであろう。人間のみが尊厳で猿やいぬが非尊厳となるのは、人間は猿を檻にいてこれを支配できるからである。第一位の者がそれ以下に向き直ってその支配者となり尊厳となる。第二位以下は、すべて被支配者として非尊厳となるのである。

これにならって、実質的な支配関係がなくても、支配を見たてることができれば、尊厳は外的に付与されてなるものであるから、尊厳となる。科学が尊厳をもって形容されるのも、それがひとを支配するものと見たてることができからであろう。さらには独裁的で破廉恥で尊厳のかけらもないと外国から侮蔑あつかいされる支配者も、国内では、尊厳をもつ。「見事な支配」と見たてることが強制されるからである。

ミケランジェロの「サンピエトロのピエタ」は、尊厳(dignity)で形容されるという<sup>3)</sup>。尊さとともに、きびしさ、おごそかさを感じさせるものなのであろう。しかし、それは、恐らくキリスト教の支配下にあるものが感じるだけのことではないか。仏教支配下のわれわれには、惨死の男性とこれをいづく女性というあの像は、どこをとっても美しくはあるが尊厳は感じがたく、むしろ、全体は奇怪な作品に見える。若いマリアは、母とは見なされず、妻と見るのが自然であろう。妻が、いづく力もなく、あるいは、若干突き放して惨死の夫を抱えている像とみなされよう。尊厳は、キリスト教徒のみにとってのことだろう。われわれは、仏像には、尊厳を感じるがある。奈良の大仏には、尊厳を抱かせられるが、これは、大仏像のもとに信仰対象としての仏を見出し、これの支配下にある自分という支配関係において、大仏に尊厳を帰しているであろう。キリスト教徒には、われわれの大仏の尊厳に似たものが「ピエタ」等の宗教芸術に感じられることがあるのであろう。支配関係のもとに尊厳は成立し、かつ外的にその評価者が付与するものであるがゆえに、同一の芸術作品を尊厳とみたり見なかつたりすることになるのである。

尊厳は、支配関係において「見事な支配」と被支配側が主観的に外的に評価したものであるから、不可侵だといいいながら、それは、侵されることもしばしばとなる。その支配関係にないものは、尊厳を帰さない。父親の尊厳は、その家族の内ではいわれるのみである。隣の家族は、その父

親を不遜で粗野で頑固な隣人にと引き下げる。支配関係から抜け出したものは、当然、もとのその支配者には、尊厳を帰すことはなくなる。キリスト教徒から、仏教徒や無神論者になったものは、「神は存在しない、信者の妄想だ」と冒瀆する。

### 3. 支配の厳しさ

この尊厳をもつ支配的なものは、支配・統御を徹底するには、その被支配のものに対して厳しさをもつ必要がある。それは、被支配の全体を導き、道から外れるものを強制してひきもどすための厳しさであり、あるいは、支配に敵対したり秩序に違反する悪に対して、厳罰をもってこれを断固として排除していくことでもある。父親の尊厳は、威厳を持って家族を先導し困難にめげず家族のために己を厳しく貫いていくところにある。日頃は寛大で少々は甘い優しい父親であるが、こどもが悪に染まりそうになると、あるいは、なまけたり良からぬ方向に向かいそうになると、厳しくしかりつけ、厳罰をもってこれに対処して悪を排除していくことになる。その子供への支配・統御は、厳しいが尊いものがあり、尊厳となる。

国家は、苛酷な政治を行うことがある。それが良民を苦しめるものの場合、かれらから尊厳と評価されることはない。だが、悪に対して苛酷である場合は、高く評価されることであろう。悪にあいまいであったり軟弱な姿勢であったのでは、よい支配は貫徹されない。良民のために、悪党とは徹底して戦うことが必要である。悪には、厳格で厳正であることが求められる。尊厳をもつ支配者は、悪との対決を避けることなく、これに厳として向かいあい、戦いをいどみ、これをつぶしていく。この厳しさが尊厳には必要である。

尊厳を「支配 Herrschaft」の有り方と見たシラーは、身体とその衝動に対決しつつ自己を貫徹する厳しさを精神の尊厳に求めている。「尊厳は、道徳的なものと感性的なものの「かの抗争 Widerstreit の表現」<sup>4)</sup> だといい、尊厳をもつ精神は、反精神の感性に対しては厳しく戦っていく強固な心をもっているべきだと、尊厳を闘争のもとに理解している。「尊厳は、抵抗の表現である。自立的な精神が、暴力とみなされるべき自然衝動に対して行う抵抗 Widerstand だ」<sup>5)</sup> ともいう。われわれの衝動は、それ自体としては社会や精神のことを配慮することはなく、野放しでは精神にとって野蛮な暴力となり、高貴な人間性を台無しにする。これに対して果敢に戦って、その衝動を克服していくのが人間精神である。自然的には壊れている（というより、現代社会の場合、商品社会が性欲・食欲を過激に挑発しつづけ本能をゆがめているというのが正解であろう…）ともいうべき人間の衝動の暴力は、死に到るまで繰り返して襲ってくる。厳しく永続的な戦いを挑みつづけることが、精神の尊厳をなすというのであろう。

カントの自律の人間の尊厳は、理性の「厳格主義」であり、厳しさをもつ。その理性は感性を徹底して抑圧して理性の独裁を人間に求める。感性や傾向性に対して、これを「拒否 Abweisung」「中断 Abbruch」し、「打倒する niederschlagen」<sup>6)</sup> べきだと、厳しく命じている。人間の尊厳

は、理性の自律にある。感性・自然に支配される他律を軽蔑し、感性に理性が負けることに根本的な悪をカントはみる。理性が感性を踏みつけ、理性の支配をもって、ひとのみのもつ「尊厳」というものが可能となるのであった。尊厳には、苛酷なまでの理性における厳しさが求められた。

「実践理性の声は、どんなに大胆な罪人をも戦慄 *zittern* させる」<sup>7)</sup> とカントはいう。その「道徳法則」には、どんなにいやでも「不承不承でも *ungern* 耐え忍ばねばならない」<sup>8)</sup> のであり、それは、「神聖で *heilig* (情け容赦のない *unnachsichtlich*)」<sup>9)</sup> ものであった。人間の尊厳は、純粹理性の自律の尊厳であり、情け容赦のない厳格なものだと、カントは、尊厳の厳しさを語る。

厳しいとは、やさしいことの反対である。やさしさは、それが関わる対象に対して、これを傷つけないよう、ショックを与えないように、そっとふれて、あたたかく保護的であることになろう。粗雑で荒々しくなく、細やかに気を使い、穏やかに関わっていく。その反対が、厳しさである。手加減することなく荒々しく強く、不快で有害な作用を加え、傷つけ苦痛・負担を与え、容赦することなく冷たく攻撃的であること等に特徴づけられるであろうか。

カントならずとも、尊厳は、優しさではない。厳しさである。支配的なものは、日頃は被支配のものを保護し支持しつつリードしてくれるが、悪には、厳格で、その威力をもってきびしく懲罰を加えるものである。「国家の尊厳」は、日頃は、国民を保護していく尊いものとして現れるが、悪に走ったもの、法を犯したものには、厳しい。国家の尊厳は、その権力つまり暴力にある。容赦はしない。ときには、「死刑」をもってする。

#### 4. 尊厳は、威嚇する

支配者は、その支配の意志を自分の支配領域に貫徹するために、これに反するような被支配の個別意志を否定して、これを強制する。その強制力が支配するものには必要である。国家の尊厳は、その暴力＝権力によって支えられている。支配に従わせる断固とした力をもっていなくてはならない。これにそむくものには懲罰をもって苛酷にである。

尊厳を有するものの支配・統御は厳格であるが、その支配は、かならずしも、実力の行使となるわけではない。むしろ、力の実際の行使はなしで済ませられる方が、一層尊厳には相応しい。ボス猿が真に尊厳であるには、噛みついて実力を行使するのではなく、そこに座っているだけで周囲を畏怖させ、かつ安心させ平穩に支配できるのでなくてはならない。国家は、その暴力を通常は行使しない。刑罰の威嚇で十分に支配ができるのが普通である。ただし、その支配秩序に違反するものには、その暴力が実行され、死をもってさえこれに報いる。

支配者が威圧するその力強さにおいて絶対的に優位にたっているなら、支配の転覆の心配はなく、余裕をもって支配を行える。被支配に対して、むやみに威圧を加えるようなことはなくて済む。その威力を知るものは、下手な抵抗はしないであろう。力を実際には行使しなくても、その威力を知る者は、その支配に背くことがもたらす懲罰の厳しさを思うと、従順になることである

う。「威嚇」は、現実の血なまぐさい戦いを回避しつつ、勝敗を決することを可能とする。尊厳を有するものは、いわゆる威嚇をもって、平和裏に支配を遂行していくことにたけている。余裕ある威力・実力をもっておれば、それをもって、被支配側に、抵抗は無駄で、報復・懲罰は手厳しいものになること必定と思わせることができる。抵抗する者は、よほどの決心がいることになる。威嚇は、動物の戦いでも一般的である。無用な争いを回避することができ、重要な機能を果たしている。実際に戦えば、勝者となる方も傷つく。敗者は命すらあやうい。威嚇は、相互にとって意味がある。

尊厳は、水戸黄門の「印籠」である。これがあるから、無用なまさがなくて済む。尊厳の尊さと厳しさに圧倒され威嚇されたものは、もはや抵抗は無用と心得て、戦う気力自体を失い、敗者・被支配者の位置に自らを引き下げていく。その「印籠」に威嚇され尊厳をいただくかどうかは、その相手次第である。これに圧倒的な威力を見出し尊厳を見出す者のみが威嚇され、支配する威力の厳しさを感じるのである。たとえ水戸黄門の「印籠」であろうとも、オランダ人には通用しなかったであろうし、犬猫に「ひかえおれー」と言ったとしても無視されたことであろう。その印籠の威力の厳しさを知る者のみがそこに尊厳を見出し、たじろいで「へっ、へえー」とひれ伏したのである。「人間の尊厳」や「生命の尊厳」も同様で、これをもっとも見なす者には威嚇的にひびき、畏ませ自由な議論を萎縮させることともなる。「神の尊厳」をとる者は、逆に、「人間の尊厳」には微塵も威嚇されず、神の名に威嚇されて、おのれを含む人間を虫けら扱いして平気である。

尊厳は、被支配側にとって、厳しいはずのものであるから、そう受け取れるように、力を加減する必要がある。あまり、軽くては、厳しくは受け取られない。相手が弱い場合は、少しの力が厳しいものとうけとられる。行きすぎると厳しさは苛酷で狂暴なものと映り、厳しいとの評価のみになる。苛酷では、尊いとの評価はなされず、尊厳とはみなされない。逆に、鈍感なものでは、相当に力を加えるのでないと、厳しいとは見なされないであろう。相手次第である。それが厳格かどうかは、被支配側の感じ方しだいである。尊厳は、その尊さとともに、被支配の者が支配の有り方について、厳しいものと外的に評価を付与するものになる。とらやライオンには、むちがやっとな厳しさと感じられるけれども、同じむちでは、小鳥たちには苛酷である。睨みつけることは、それだけで、幼児には、厳しいと受け取られるが、がき大将には、優しいことと見なされる。

## 5. 威厳

威厳は、もはや苛酷な暴力も威嚇も不要になった、つまりは被支配者の抵抗・反抗の意志を完全にくじいた、支配者の圧倒的な状態をしめすものであろう。厳しい威力を背後におさめた、被支配のものをして絶対的で崇高な価値あるものとして拝跪させる「厳かさ」となる。その圧倒的

なもの、堂々とし重々しいものになり、あるいは、被支配側のあり方とはまったく異質の見事な豪華な装いをもって卓越性を示すことになる。尊厳は、厳（きび）しさであるよりも、厳（いか）めしく厳（おごそ）かとなる。

（厳（いか）めしさ）尊厳のある支配は、不動で、堂々として大きく圧倒的で立派なものであることが理想である。その支配が軽くて落ち着かないのでは、被支配側も不安定を感じ、その命令にも従うに抵抗を抱きやすくなる。尊厳は、厳（いか）めしくなくてはならない。厳（いか）めしいものは、軽薄の反対で、堂々としていて重々しく、盛大な様子をもつ。大きなもの・重いものは、小さく軽いものに比して、大げさになり、ものものしいものとなる。

支配的威力をもち、上にそびえるものは、その力が抑圧的なものとして迫ってくる場合、危険であり、恐怖の支配となる。だが、その威力が支配の安定に寄与するもので悪への厳しさに限定されることが周知されると、それは、一般には危険ではないのみか必要なものとして肯定的に受け入れられる。その支配の威力は、威厳となり尊厳となる。尊厳をもつ父親は、子供を有無を言わずねじ伏せる厳（きび）しい畏怖の存在であるのみではなく、超越的で重々しく厳（いか）めしく威厳をたもったものである。頼みとなり、尊いもの・有りがたいものとして、上に頂くのである。

シラーは、尊厳の支配において、強さや恐怖をいう。尊厳は「力 **Kraft** によって支え」<sup>10)</sup>られるのだとし、「尊厳では、主体は、自立的な力 **Kraft** として自身を証している」<sup>11)</sup>のだという。シラーにおいて、尊厳を有する精神が支配するために向かう相手は、感性であり、これはかならずしも合理的な説得を聞き入れるようなものではない。一方的に精神は強制する。その威力をもって、反抗する感性的なものや自然的衝動を抑圧し畏怖させ強制して精神の支配を確実にしていく。ただし、「真の偉大は、決して恐怖を引き起こすべきではない」<sup>12)</sup>と付記する。「単なる力は、なお恐るべきで際限のないものであろうが、決して荘厳 **Majestaet** は与えられない」<sup>13)</sup>と。畏怖させるだけの厳（きび）しい力では、尊厳のなかの尊厳としての荘厳はなお与えられないというのであろう。被支配のものが納得できるもので、かつ、その威力も反抗をさそうような軽薄なものではなく堂々としていて、したがう以外ないと感じさせるだけの圧倒的に大きく厳（いか）めしいものであることが真の尊厳には必要なのであろう。

（厳（おごそ）か）支配的なものが、その支配の威力を見せつけることが不要になるその完成は、おごそかさをもつことであろう。厳かさは、それ自身は、威嚇的な威力をもちや見せない。戦いの威力としての尊厳の「いかめしさ」に対して、平和時の至上の尊厳の「おごそかさ」である。それが見せるのは、尊厳の存在様式が豪華で華やかであることである。その盛大ぶりにおいて、圧倒的な威力を間接的に示すのみである。直接的には、それは平和時における豪勢さを誇示するものである。厳しさにエネルギーをあまりつかうことがなくて済むと、その余裕・余力は、非攻撃的な方向にまわされ、厳かさになっていく。

尊厳を有するものは、並みの上位にはとどまらない。至上至高なのである。それを、厳かさは、その存在様式のもとに示す。華美・豪華・贅沢といわれるような、豊かで力があり余裕の有るものの形式をとる。その生活様式も、いちいちに仰々しく盛大である。軽薄な被支配者の生活形式に比して、なにごと大げさに重々しく、ものものしい重大ぶりをもった様式をとって、厳かである。それは、華美であるが、単なる美ではなく、壮美であり、崇高さをもったものである。尊厳は、根本的には、そう評価する被支配側がつくる。いかめしく厳かで尊厳であるとは、そのように被支配側が評価しているということである。被支配側からいうと、自分たちの尺度では、はかれず、その並のあり方からは超越したものとして、豪壮で厳かなのである。その支配の威力が圧倒的であるととも、その存在そのものが被支配のものからは超絶的な高みにあってそれは尊いのである。

「神の尊厳」や「国家（元首）の尊厳」はいうまでもないが、「人間の尊厳」も尊厳という以上は、こういう「いかめしさ」「おごそかさ」を有するのではなくてはならない。尊厳を有するひとの生死の選択には、「厳しさ」があるのみではなく、「いかめしさ」「おごそかさ」もある。それは、重大な決意のもと、不動の重々しさをもち厳（いか）めしく、人間の意志の大きさ、堂々ぶりを感じさせ、感動的で厳（おごそ）かなものであろう。

## 6. 尊厳の前に、かしこまる

尊厳を有する支配的なものを、被支配側は、畏怖する。反抗し違反することがなければ、加えられることのない懲罰であるが、その厳罰を受けている者を見て、その苦痛を想像し、同じ被支配側にいるものとして、恐怖を感じる。恐れは、予防感情で、現実懲罰の苦痛をもたないで済むように、危険からわれわれを遠ざける。懲罰をうけないようにと、従順に支配にしたがうことになる。

畏まるのは、単に恐れることではない。恐れるのは、自分の身に危害が加えられることが確実と判断しその危害を少なくしようと身構えるものだが、畏まる場合は、威力をもつもの前で、これに背くと危害が加えられると承知し、かつ、これに背くことがない場合には、その危害の及ばないことをふまえていて、注意し萎縮し緊張して構えている状態であろう。畏まるのは、不安ともちがう。不安は、危害が及ぶ可能性はあるが、確定的ではなく、身構えを定められず安らがないのである。だが、畏まる場合は、不確定的ではなく不安がることはない。反抗すると確実に懲罰があり恐怖することになるが、反抗せず注意しておればこれまた確実に安全であると心得ている。

威厳有るものに面して、被支配のものの気持ちは、引き締まる。だらしない状態でリラックスしていたのでは、その尊厳を有するものを尊びこれに注目するという姿勢を欠くものとして、その姿勢は報復される危険を生じる。そうならないようにと緊張してうけとめる必要がある。ある

いは、それへの振る舞いには、へまをしないように細心の注意をしているべきであり、身を引き締めて真剣な対応が求められる。尊厳をもつ支配者のまえでは、緊張し気疲れする。

尊厳を有する支配者のまえの被支配者の姿勢は、その緊張は、闘争に向かう者の攻撃に際してのそれではない。危険に身構える緊張でもない。その典型は、なんといっても召使いの姿勢であり、気遣いの緊張である。従順な被支配者として、礼を欠くことのないようにと気を遣い、緊張する。召使いとしての行為が気のゆるみで失敗するようなことがないようにと、細かなことに気を配り緊張しているのである。

尊厳をもつものは、圧倒的で大きく、超越したものであり、これにかかわる被支配的なものは、当然、小さいものになる。この小さい者は、尊厳の前で、これに見合うようにと小さく萎縮していく。尊厳を有する支配者に対して、被支配者は、その支配にしたがう従順な存在として、支配の場にひっそりと片隅にひかえるべきものである。

威力をもつその支配の命令・法への違反には厳罰がまっており、被支配の召使いは、その厳罰を受けないようにと小さくなっているのでもある。大きいと目立ち、危険も多くなる。よけいな行為も控えて、危険を秘める支配者の威力の前では極力めだたないようにと萎縮してやりすごす。対応の失敗がないようにと細心の注意をし身構え緊張し萎縮するのである。「人間の尊厳」や「生命の尊厳」では、古典的な、王や神の尊厳への対応と同じではないが、やはり、萎縮しかしこまるものであろう。「生命の尊厳を侵すものだ」と聞くと、緊張し細心の注意をと思うものであろう。

威力ある支配者のまえでは、その意にそわないようなことは避けねばならない。懲罰はその意に反することに対してなされるのである。その意に沿わないような自主的な行動は控え慎まれるべきこととなる。支配者の支配に従順に、その意にかなうようにと控えているべきで、勝手な行動は慎む必要がある。

ひとは、相手に応じてその態度を変えていく。尊厳を有するもののまえでは、尊大な態度はいうまでもなく、対等なものへの態度も禁止である。尊厳は、はるかな高みにあるのであり、あおいで見べきもので、その態度は、これを見おろす尊大なものになってはならない。そういうことにならないように慎むことが求められる。対等のあつかいも、不遜である。被支配の者は、支配の尊厳のまえでは、下位にあることをその態度でしめし、なにごとひかえめに慎むことが必要である。近づいて、なれなれしくすることは、とくに慎み、さし控えるべきである。尊厳の対象は、もともと被支配のものから超越した高みにある。

## 7. 不可侵の尊厳に、拝跪する

尊厳を有するものは、至上・至高のものとして凡俗を超越している。これを、下賤なもの・被支配者は、自分たちのところへ貶めて賤しめてはならない。触れてはならない。「不可侵」である。この禁を犯さないように、遠ざかり引き下がって距離をとることが求められる。尊厳をもつもの



の前では、非尊厳の被支配側は、これを尊びつつ敬してみずからを遠ざけ、遠慮をする。「触らぬ神に祟りなし」でもある。触れて賤しめて、その逆鱗にふれて厳罰をうけることのないようにと注意すべきである。

親しく相並ぶところには尊厳は創造されない。遠くにいただき、拝跪するから、その対象は、不可侵の高みに高められるということでもある。もともとは近接していたとしても、関与の仕方、対応について、上位のものが接触を禁じることで距離がつけられる。さらに下位のものが自身ひきさがり、これに触れることをいましめ拝跪する態度をつくることで、不可侵の距離ができて、その不可侵の上位は、尊厳を獲得する。尊厳を有するものは不可侵の高みにあるものとして、下賤の側ではこれを遠ざけて敬するが、遠ざけ敬する態度自体が尊厳を創造していくのでもある。何の変哲もない山でも、あるいは、気味の悪いへびであっても、ひとがこれに近づきがたく思い上位に遠ざけ、さわりがあって触りがたく拝跪していくなれば、それで、尊厳をもった立派な神ができあがる。

尊厳は、至高のものとしてそびえているものであり、「尊い」ものとの扱いが被支配側に生じる。尊厳において尊いとは、自分たちからいうとはるかな高みに超越している高貴という評価であり、それにふさわしい態度が尊いものを「尊ぶ」ことであり、「敬う」という態度、「尊敬」になる。尊いものをうえにいただいて大切にし、これを汚したりしないように高く遠ざけて、したがって自身を低きに位置付け触れることがないようにと引き下がっていくのである。

尊敬は、軽蔑の反対で、その対象そのものに高い価値を見出し高くに位置付ける態度をとり、かつ嫌悪される高い存在とちがい、その高みの存在を好ましいものと受け入れていく。ときには、下賤の自分の見ることでその気高いものが汚れることを回避し、あるいは、攻撃的な「にらむ目」と受取られることを避けようと、視線をそれに向けることを遠慮することもある。しかし、「触れる」ことは近接・密着して可能となることで、これは尊厳を有するものを引きずり下ろす行為となり厳禁であるが、見るのは、遠隔のものを見るものとしては、高遠な距離において尊いものを敬することとなりえて、かならずしも尊厳の不可侵にふれることにはならない。尊厳の対象を仰ぎ見て、その尊い「気」をもらって自分もその高貴に浴している気分になってよい。至高の仏を尊崇するものにおいて「念仏」をいう。仏を念じること、つまり、仏をこころに想い描き見つめるなら（観想念仏）、それだけで、救済がなるという。阿弥陀仏を見、浄土を見ることができたら、その見るという観念的な行為だけで、その彼岸の極楽浄土に片足をかけることができるとの理解である。尊厳の存在を見ることで、これに感化され、これの高貴さの気でわが身が薫じられるのである。

尊敬は、価値的に上に位置するものに向けられ下に向けてするものではないが、かならずしも、上下の関係になくても、対等に並ぶもの同士が相互に相手を尊重しあうことでも可能である。現代の自立者同士の関係では、相互に、尊敬しあうことのできる信頼と誠実の関係をひとつの理想

的な交わりとする。だが、これは、尊厳の関係にはならない。尊厳は、支配的なトップを不可侵の至高存在として、これにかかわる下位の被支配的なものがこれを尊び畏怖する関係である。

尊厳を有する支配的なものに、被支配者は、拝跪する。その身体的表現でいうと、ふかぶかとお辞儀したり、ひざまづくこと、あるいは、ひれふすことになる。自分が絶対的な低さにあることを示すのである。かつ、それらは、反攻撃的な姿勢をとり反抗の意思がなく恭順であること、あるいは相手が攻撃するのに好都合な状態にと自らをおいていることを表現する。さらには、敗者であることを自らが表現するのでもあろう。

神仏等のまえで手をあわせるのは、攻撃的な腕力を機能停止させていることを示すのであり(数珠やロザリオをもつのは、おそらくは、自縛することを表すのであろう)、ひれ伏すのも、そういう反攻撃的な姿勢を表現するものであろう。それを反復することで、命乞いをするにもなる。いまでは、ひれ伏すのは、神・仏に対してのみであろうが、かつては、権力者には、文字通り、はいつくばってその恭順さをしめしていた。

尊厳のまえに非尊厳のものがとる、ひれ伏し拝跪する立ち居・振る舞いは、その無力・敗北・無抵抗を表現したものになるが、その身において拝跪の姿勢をとるということは、当然なことだが、精神的に拝跪していることでもある。むしろ、精神的に完璧に恭順になり拝跪しているから、そういう振るまいに出るのである。近年は、社会生活では、民主主義下、対等なかかわりをするのが一般であるから、人間関係では、拝跪のすがたは、よほどの異常事態でもないなら、そのままにはとられない。せいぜい、信仰対象にそうするぐらいであろう。しかし、精神的には、尊厳を有するもののみでは拝跪しており、無抵抗・恭順になり、批判精神を麻痺させるようなことになっている。「生命の尊厳を侵すものだ!」と批判されると、威嚇され、たじろぎ、無抵抗になりがちなのは、そういうことである。「尊厳」は、なお、水戸黄門の「印籠」として機能していて、ひとを精神的に拝跪させることができる。

## 8. 尊厳を有するものの傘下での安堵

尊厳は、本来的には、支配者への被支配者がわからず、「見事な支配」という評価として成立する。その「支配」下にあつて、その厳しさを感じているのだが、同時に「見事」と高評価しているのであり、ひとは、この尊厳ある支配に庇護を見出しているのである。尊厳をもつ国家は、これに従わないものには、厳罰を持ってするが、そうでないものには、むやみに干渉したり、その暴力を行使することはない。悪への厳格な支配は、悪から保護されることとして、加護・安堵となる。

支配者が強力であり威力あることは、それが暴力として恐怖をよぶだけである場合には、尊厳とは評価されず、嫌悪され怨嗟のまとなり、非尊厳・侮蔑の評価を下される。組織暴力団の威力はいくら大きくても、この暴力に恐怖させられる一般市民には、尊厳とはなりえない。これに

対して、民主国家の警察は、その威力を暴力として一般市民にはむけることはなく安心してよい。むしろ、犯罪者の暴力に圧倒的な威力をもってし、これから市民を守る。その威力には安心して、頼もしい警察ということになり、市民は、ときに、これに尊厳の勲章を付与する。暴力団撲滅に献身する頼もしい警察官、無法者と毅然として渡り合う保安官、これらの威力ある権力に対しては尊厳の評価をもって応えることがある。見事な支配は、被支配側に頼もしいこと限りないものとして、その安堵や依存をいいうるのでなくてはならないであろう。

ひとは、群居動物であり、その構成員はしばしば支配・被支配関係をむすんで、有機的全体をつくる。その組織の全体は自分を保護してくれるものとして、その傘下にあることをその構成員は好ましく思い、これに属して安心する。その組織に一体化し、これに尽くすことにもなる。その組織のトップに支配者がいる。組織の威力は、この支配者の威力となり、組織への帰属は、その支配者への帰属・一体化ともなる。個人的にその支配者が有能・有力であれば、これを絶対化して、尊厳をもって評価する。尊厳をもつ支配的なものは、頼もしく、被支配者は、これの傘下にあつて安心して、これに与し、ひいきすることになる。

閉じられた支配・被支配の一体的組織のうちに被支配者は安堵している。課長を尊厳とするものは、その課という組織に一体化して充足しており、それのそとの部長や社長はさしあたりは消えていて、課長がトップであり、すべてである。そとのことは問わないで、課長を頂点においてこれに尊厳を帰し、これに依頼依存してその傘下にいることを誇りとする。

尊厳を有する自分の組織とその支配者に対して、被支配者は、これに確実に帰属して保護されることを、みずからが自発的にその手足・部品となることで確認する。支配者の命令に忠実となることで、尊厳を有する支配者とその組織への帰属を深める。忠実な召使として役に立つことは、自己も尊厳の一部を構成することとして、誇りとなる。

人間、自然、科学は、現代の尊厳の代表であろうが、いずれも、本来的に厳格な支配的威力をもつ（人間はもちろん自然も科学もその支配には自己を貫徹する冷厳さがある）が、それとともに、これに帰属しているものには頼もしさ・安堵がある。尊厳を有する（理性的）人間は、人と自然の合理的支配をし、これは、本来、自然にとっても人間相互にとっても頼もしく頼りがいのあるものであろう。自然の尊厳はというと、厳しいが、その法則にはえこひいきなく必然的なものとしてその貫徹には安心して、これに適切にかかわるなら絶大な恵みが可能となる頼もしいものである。科学は、客観性・普遍性・法則性のもとに厳しいものだが、であればこそ、科学の合理性にしたがうなら、非合理の神仏に比して頼り甲斐がある。尊厳をもつ神から「切断した右手は、また、おのずと生えてくるから、捨ててよい」とお告げがあったとしても、尊厳をもった科学が「縫い合わせれば、なんとかなる」といっていたとすると、神は無視して（神の尊厳を侵し）、科学の尊厳を頼みとすることであろう。

## 註

- 1) I.Kant;*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*. A78 „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E. Cassirer. Bd.4(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*) S.294.
- 2) I.Kant;*Metaphysik der Sitten*. A78 „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E. Cassirer. Bd.7(*Metaphysik der Sitten*) S.246.
- 3) cf. Michael J. Meyer ; *Dignity, Death and Modern Virtue*. In “American Philosophical Quarterly” 1995. Vol.32.Nr.1. p.46
- 4) „Schillers Werke Nationalausgabe“ Bd.20(Philosophische Schriften) Erster Teil. Weimar. 1962. S.298
- 5) Schiller; *ibid.* S.297
- 6) Kant; *Kritik der praktischen Vernunft*. A128ff. „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E. Cassirer. Bd.5(*Kritik der praktischen Vernunft*) S.80ff.
- 7) Kant; *ibid.* A142. Bd.5. S.88.
- 8) Kant; *ibid.* A152. Bd.5. S.93.
- 9) Kant; *ibid.* A231. Bd.5. S.139.
- 1 0) Schiller; *ibid.* S.300
- 1 1) Schiller; *ibid.* S.300
- 1 2) Schiller; *ibid.* S.305
- 1 3) Schiller; *ibid.* S.306

## (補) The Dignity of Human Being, State, or God

### -the Original Meaning of Dignity-

Yoshiki KONDO

(resume)

- 1) Concerning the treatment of dignity, man gives dignity only to the top by distinguishing the top of supreme height from the others absolutely.
- 2) But some supreme matters do not have dignity, for example, “Miss World”. In order to have dignity, the supreme top must function as a ruler. Originally dignity can exist because of the existence of subordinates who regard their ruler as the highest excellent top. Only the family give their father dignity and only the subordinates of an organization give their president dignity.
- 3) Governance with dignity has a severe and magisterial character which is similar to that of national grandeur. Furthermore, it must be solemn, magnificent and on an inviolable height which is remote from the position of subordinates.
- 4) The attitude toward the objects with dignity must involve “respect”. In the old days people genuflected to God and kings with respect, because of their dignity. Today people genuflect to the dignity of human beings and their lives. When they genuflect to dignity, they need to ignore the negative aspects of the objects which are regarded as having dignity.
- 5) The Dignified must be reliable and his subordinates are proud of being members of his organization. They feel sure under his arm.

#### 1. Venerability and sublimity

“尊嚴 SON-GEN(dignity)” in Japanese consists of “尊 SON (venerable)” and “嚴 GEN(severe)” and means a venerable severe matter. A “SON(venerable)” thing has sublimity with outstanding value and “GEN(severe)” means the rough pitiless without gentleness. And SON(venerable) of SON-GEN(dignity) simultaneously means “to respect” and may indicate the attitude toward the dignity which is respected or highly esteemed.

The characteristic of “dignity(SON-GEN)” primarily comes from a venerable sublime matter, as shown in “SON(venerable)” of a Chinese character. Supposedly the dignified has a high quality. The “high” quality in this term is not relatively “high” but absolutely “high” where no one can reach; dignity has a sovereign and supreme character. It is presumed that for example, god who is dignified has the absolute value of a superlative height. Kant defined dignity as “unconditional incomparable value (unbedingter unvergleichbarer

Wert)<sup>1)</sup>, i.e. absolute value. Dignity has an absolute transcendent character whose value cannot be compared with that of others. “Human dignity” demands that human beings must be treated as absolute and inviolable. For example, when employees in a company see the chief of their department as dignified, then he is the dignitary. In this situation the employees ignore the existence of the president of this company who is definitely in a higher position than the “dignified” chief. And so, the chief can be the “best chief of the world” who is sovereign and supreme.

Quantitative differences can sometimes play a role in distinguishing the “top” from the others and only the top is treated as dignified. Others are all just subordinates – they cannot be dignified. Every organization has hierarchy which is valid within each organization. In such organizations, only the top can be esteemed as dignified: the others are just subordinates. When the difference between the top and the person (or object) that is in a number 2 position is very small, one needs to manipulate this difference quantitatively. But dignity is an absolute quality. Therefore one needs to make a quite sharp distinction between the dignified person (or object) and the not dignified qualitatively. “The dignity of human beings” can come into existence because human beings are sharply differentiated from the undignified apes who are positioned biologically directly behind the human beings; that is, they are in the nr. 2 position. Only the human beings, that is, the first (top) have dignity. They are so sacred that no-one can violate their value, dignity. But human beings also become un-dignified in front of god: they are dealt with like trivial insects worthlessly. Whoever respects the top and sees in it absolute worth, makes dignity of this top. The dignity exists because of treating the top as supreme and the others as undignified.

It is said that dignity is an inherent character. For example, Kant describes, “Dignity (the absolute inner value)<sup>2)</sup>. But, in my opinion, it is a value which exists because the external individuals respect a person (or an object). For example, the chief, who is mentioned above, has modest followers who respect him. So he can be dignified. But when he has other followers, who pay no respect to him, he is no longer dignified. His dignity turns into indignity. The presidents and managers, who are positioned higher than the chief, never recognize the dignity of the chief because they have a higher quality than his. And people who are nothing to do with this company cannot understand the worth of his dignity as “the best chief”. So dignity cannot be an inherent character.

Because of this, the supreme inviolable dignity can be unexpectedly invaded frequently. Although one esteems a person (or an object) as supreme, incomparable, and absolute - hence dignified - there are many persons (or objects) that are also evaluated as dignified. When one encounters two or more dignified objects or persons, the worth of their dignities cannot maintain their unequivocal character; thus the dignity cannot exist any more. In the case of respecting either “dignity (sanctity) of life” or “human dignity” in the vegetative senile, one form of dignity often may be invaded. The dignity of the chief must be suspended,

when the president is present. Only subjectively man estimates one person (or object) as the best, but objectively there are many persons (or objects) that are positioned higher than he/it. Or the second often stands close to the top. This subjective estimation of the absolute must be immediately limited in these situations. When man should estimate something according to the quantitative differences, so in the objective relativity, the subjective estimation of inviolable dignity must be replaced with objectivity.

## **2. Dignity; its character of domination and control**

A person (or object) that has dignity must be inviolable, for his dignity makes him venerable and supreme. Such a person (an object) cannot be invaded and it is better for persons around him not to invade him because he punishes them severely. Fundamentally the person (object) with dignity has a strong power of domination. Dignity(尊嚴SON-GEN) in Chinese characters means not only “尊SON(venerable)”but also “嚴 GEN(severe)”. The latter part denotes that dignity has a hard, severe and reverential aspect.

Dignity has the quality of “severity”. This quality originates from the attitude of a ruler who has dignity. In my opinion, essentially, the dignity is established on the basis of domination and control. Both the one who is given dignity, and the one who gives dignity exist in one system of domination and subordination. Only the believer in God makes the God dignified. (The believer is the servant of God.) Only the family esteem their father as a dignitary. Dignity is superlative or supreme, but a person (or object) that is just superlative and supreme cannot be dignified. Miss World is not dignified. Most of the world No.1 people who are registered in “the Guinness Book of Records” also do not have dignity. Because they do not possess the character of domination or control. Dignity can be dignity when the subordinates in this relationship of dominance can be proud of their “top” and the dominant relationship between their top and them and satisfied with this relationship.

The chief, who is mentioned above, can be dignified in spite of the existence of the president in the company (who is definitely in a higher position), because there is a relationship of dominance between him and his followers: when only they are in a space, can they ignore the other people who are on a higher position than the chief and can concentrate on this relationship. The reason why one makes a sharp distinction between the top and the others to make the top dignified although there is just a slight difference between them, may be this relationship of dominance between the dignified and the subordinates. Only human beings are dignified and apes or dogs are treated as un-dignified because human beings can engage and master them; so human beings can dominate them. The “top” – the “first” – functions as the ruler of his subordinates and by that he becomes a dignitary. All the others under him are subordinates or servants and are treated as un-dignified.

Therefore, though there is no visible clear (real) relationship of dominance, such as that between king

and knight, a person or an object can be regarded as dignified, when the invisible but virtual dominance is created by the people around him/it, because dignity is quality which can be given by them. For example, science can be described as an object with dignity because there is a virtual relationship of dominance between science and human beings: science dominates them and is thus the ruler.

It is said that the masterpiece “Pieta in San Pietro” by Michelangelo deserves dignity<sup>3</sup>. Christians can feel the severity and oracular quality of this work. However this picture cannot be a work of dignity for the Buddhists, because there is no relationship of dominance between the Christ and them. I, a Buddhist, think that this work is very beautiful but does not deserve dignity. Honestly speaking, the picture looks somehow bizarre. The young Maria cannot be his mother but rather resembles his wife. The young wife holds her husband by death with a certain emotional distance. This work can be a masterpiece of dignity only for Christians. Per contra, the Buddha of Todaiji-Temple in Nara can be a masterpiece of dignity only for Buddhists. Buddhists recognize all Buddhist statues as dignified objects in general. Therefore the huge statue of Buddha in Nara is also dignified for them because they would recognize the Buddha as an object of their faith and will vest with dignity this huge Buddha in their faithful subordination. Like their dignity for the Great Buddha, the “Pieta” of Christian art is regarded as dignified by Christians. Dignity is formed on the basis of the relation of dominance by the external estimation of a subordinate valuator. Thence the same art is regarded now as a work of dignity which then was regarded as not having dignity.

Dignity should be inviolable, but is frequently invaded because it is formed by the external subjective estimation of subordinates that the relationship of dominance between the dignified and them is a “brilliant domination”. A person who isn’t subordinate in this relationship of dominance, never accepts him as the dignified. The dignity of a father stands up only in his family. The dignity which is valid in this family may be deflated by his neighbours. He can actually be regarded as haughty and stubborn by them. Furthermore a person, who escapes from a relationship of dominance, can never respect his past dominator/ruler and will never regard him as dignified. Whoever changes his religion from Christianity to Buddhism or turns atheist desecrates Christianity, saying, “God doesn’t exist. It’s a delusion of believers.”

### **3. Severity and dominance**

The ruler who has dignity needs to be severe to the ruled people in order to rule or control them. With severity he leads the ruled and forces them to stay under his control. Furthermore the ruler must fight with the evil which tempts the ruled to resist him or disobey his orders. The dignity of a father is possible in the situation where he leads his family with augustness and persists in his ideal for the family severely in spite of much difficulty. While a father may usually be generous and rather sweet and kindly, if his children are involved in a crisis of some misdeed, or fall into truancy or error, he will scold them severely, confront them



with hard punishment, and try to exclude the wrong. However, his rule and control over his children are severe, but venerable, and he comes to acquire dignity.

Some states implement brutal politics. In the case where this politics makes only the citizens worry, it is not esteemed as dignity by them. However the ruler fights against the “evil” with the policy of this “brutal” politics, his political performance can be accepted as dignity by citizens. When his performance against the “evil” is ambiguous (or not clear and coherent enough), or has a weak posture, the ruler cannot govern the citizens well. It’s necessary for a good ruler to fight against the evil thoroughly for good citizens. Usually the rigidity or strict justice as a ruler is required to confront the evil. Confronting the evil unhesitatingly, the ruler with dignity faces it firmly and crushes it in his fighting. This severity is necessary for his dignity.

Schiller, who regarded dignity as the quality of “rule (Herrschaft)”, asked the dignity of spirit to provide the severity which could accomplish the compulsion of spirit against his body and impulse. He said, “dignity (Wuerde)” is “the expression of that conflict (Widerstreit)<sup>4</sup>” between morality and sensibility. His interpretation of dignity is that the dignified spirit has neither harmony nor cooperation, but must keep a strong mind to fight severely against the sensibility of anti-spirit. That is, he understood dignity on the basis of conflict, and said “Dignity is the expression of resistance (Widerstand). It is the resistance of independent spirit against the natural impulse that must be regarded as violence.<sup>5</sup>” Our impulse in itself respects neither society nor spirit. An unchecked impulse perpetrates barbarous violence against our spirit and kills our noble humanity. Against this impulse the very human soul should fight boldly and conquer it. The violence of our impulse that may be defeated as a natural faculty (it may be more correct to say, during our modern times, that the commercial society continually is provoking our sexuality and appetite excessively, and has distorted our instinct), repeatedly attacks us until our death. Our dignity of soul should be formed by the challenge of permanent severe fighting.

Kant’s definition of the dignity of an autonomous human being is the “rigorism” of reason, and the autonomous person has severity. This reason radically oppresses sensibility, and forces man to accept the autocracy of reason. Kant described how one must fight against the sensibility or inclination severely, because of the reason, to execute the following acts; “refusing (Abweisung)”, “interrupting (Abbruch)”, and “overthrowing (niederschlagen)”<sup>6</sup> the sensibility and inclination. The dignity of human beings exists because of the autonomy of reason. Kant scorned the heteronomy in which we are dominated by sensibility and nature, and argued that the “wrongness” is that the power of reason is weakened or defeated by the sensibility. The dignity that only mankind has, is possible by the domination of reason in trampling the sensibility. The cruel severity of reason is required in order to have dignity. Kant says, “its (practical reason’s) voice makes even the boldest sinner tremble”<sup>7</sup>. To the moral law we must submit ourselves, “even if we feel distaste for it, but we must tolerate it”<sup>8</sup>. “The moral law is sacred (relentless)”<sup>9</sup>. Concerning the severity of dignity Kant

says that human dignity is the dignity of autonomy of pure reason, and is relentless and rigorous.

“Severe” is the antonym of “gentle”. The gentle may touch tenderly and guard warmly without harming or shocking the object concerned. Without coarseness and roughness it attends finely and is quietly concerned. The contrary of these items is the severe. The qualities of severity may involve imposing roughly a harmful unpleasant strong action without modification, inflicting burden or pain injuriously, and attacking cruelly or mercilessly.

According to Kant and examples from our daily life, dignity is not tenderness, but severity. A ruler normally leads, protects and supports his subordinates. However, he acts against offences rigorously enough to punish a person who committed them. Although “the dignity of the state” seems usually venerable for its protection of citizens, it is severe to a person who commits a wrong act or violates the law. The dignity of the state exists in the power, i.e. violence. It is brutal. Occasionally, one can be executed – a “death penalty”.

#### **4. Intimidation and dignity**

In order to accomplish the will to rule in the controlling domain, a ruler denies the individual will of subordinates who stand against his control, and forces it on them. This force is necessary for the ruler. The dignity of the state is supported by its violence = power. It must keep the decisive power to make the subordinates follow its orders. It punishes the disobedient absolutely and cruelly.

The rule or control that belongs to the dignified ruler is rigorous, but the ruler need not practice a violent method. The ruler that does not practice a violent method is more appropriate to be respected as the ruler by dignity. In order to maintain his dignity as boss monkey, a monkey should not act with actual force, for example, biting or pawing other subordinate monkeys; rather, he must be able to rule peacefully just by sitting there and to make his group respect him and feel easy under his control. A state does not usually use its actual force. In general, its rule is fully possible with the menace of punishment. However, an offender against the ruler must suffer from its violence. Sometimes one must pay for the crime by death.

When a ruler can dominate absolutely because of his strength, he must not be worried about the overthrow of his rule and can rule his people with ease. And he need not intimidate his subordinates. The people who know how strong their ruler is, may hesitate to resist his rule. They are obedient to him because they can imagine how hard the punishment may be, when they disobey him. Menace is one method to decide the outcome of the battle while avoiding an actual bloody battle. Whoever is a real dignified ruler can rule in peace by showing his strength and sometimes menacing the public cleverly. He has generous power and ability. Showing the existence of this power and ability he makes his subordinates think that it is not clever to disobey such a powerful, dignified person. They will be afraid of him or, precisely speaking, of the image of the punishment which he gives them when they are not obedient to him. Menace is common in the animal

world. This method functions to avoid needless struggle. The actual fight is normally not so much good for both, the winner and the loser: because they fight often until one of them is dead. So the winner can also be wounded and the loser can die in such an actual, physical fight. Menace is meaningful for both of them to avoid this kind of outcome.

The “INRO (pillbox)” of Mito Komon( vice general of TOKUGAWA-SHOGUNATE in the feudal age of Japan) functioned as a menace because it was the symbol of dignity and authority. Owing to this symbol men could avoid some unnecessary conflict. Whoever is overwhelmed and threatened by the severity and sanctity of dignity, esteems his resistance as vain and loses his will to fight. Before the symbol of authority he may willingly be a loser or subordinate. Whether the dignity of the “pillbox” with the emblem of the Tokugawa family functions or not, depends on the individual who is shown the “pillbox”. Only he who sees it as representing the overwhelming force and dignity, is menaced by it or feels the severity of the ruling force. If the “pillbox” of Mito Komon was shown to a Dutch man who does not know the meaning of the emblem, he cannot be menaced by it. Furthermore dogs or cats ignore the commands of Komon’s follower who is showing the “pillbox” to them, because the dignity of the “Komon” and his “pillbox” have no meaning for them. Only he who knows the severity of the power of this pillbox, discovers the dignity, and shrinks from it, and prostrates himself saying “Very good, Sir”. The dignity of human beings and of life function in the same way. A person who respects them and is somehow menaced by their existences, cannot argue about this theme (the dignity of human beings and of life) freely; he hesitates somewhat to speak about that. A person for whom the dignity of God is the absolute, tends not to be menaced by the dignity of human beings. He is ready to do everything under the name of God. Therefore the dignity of human beings (including himself) is nothing for him, compared with the dignity of God. Such a person often treats the dignity of human beings cruelly.

Though dignity must be severe for subordinates, the dignified ruler has to adjust the grade of severity so that the subordinates can accept it. If he is not severe enough, he cannot be respected as a severe ruler. Or when the subordinates are extremely weak and naive, they will feel that the ruler is very severe though he does almost nothing severe. If his severity becomes too great, man regards the severity as cruel and ferocious, judges it as merely rigorous. If it’s regarded only as cruel, it cannot be venerable anymore, and hence never dignified. On the contrary, an insensitive man cannot regard it as severe. The grade of the severity should be adjusted to individual groups or persons: How the severity of a ruler is accepted depends on its victims (namely subordinates). The dignity as severity and venerability is the evaluation that is externally given by subordinates to the ruling style of their ruler. The whip for lions or tigers in a circus severely frightens them but cannot kill them. However this whip can be fatal for a little bird. When an adult stares angrily at an infant, it will begin to cry because it is frightened by the severity of his eyes. However, the same action cannot

function to frighten a juvenile bully. The severity of the adult's eyes is not severe enough for him.

## 5. Dignity as augustness

The dignity can show the overwhelming power of the ruler, who now need show no cruel violence or menace to his subordinates, i.e. has destroyed completely their will of resistance or disobedience. The ruler must always imply the existence of his severe absolute power and his dignity must be equal to the solemnity that makes subordinates genuflect to his transcendent sublime worth. His absoluteness is grand and grave, and shows the distance between him and his subordinates because he is brilliant gorgeous and therefore different from the others. The dignity of this art of ruling can be described not so much as severity, but rather as cragginess and solemnity.

(厳めしさ IKAMESISA(cragginess)) The ideal of dignified ruling must be steadfast, grand, massive, overwhelming, and gallant. If the domination of the ruler is light and restless, his subordinates also feel uneasy and tend to resist him. The dignity must be magisterial. Rather than being light and thin, a magisterial thing is grand and grave. Compared with a small light existence, a great heavy one becomes grandiose and ceremonious.

When the dominant power of the ruler is oppressive and cruelly urges people to obey, it is dangerous and is a reign of terror. But so long as the subordinates understand that this power contributes to the stability of governance and its severity is applied only to fighting against the offences of the community, they will accept it positively as not being dangerous but requisite. This dominant power acquires augustness and dignity. The dignified father is not only the terrible top that is so severe as to force his children peremptorily to obey him, but also an august person with the transcendent grave severe fashion. He is accepted as a venerable grateful reliable person by his children.

Schiller describes the strength and the fear in dignified rule as follows; dignity (Wuerde) is “supported by power (Kraft)”<sup>10</sup>, “in dignity.....the subject legitimates itself as selfstanding power (Kraft)”<sup>11</sup>. In his opinion, since the soul is ruler and has dignity, the soul takes care of the sensibility which does not receive spontaneously and easily the rational persuasion of the soul. The soul must force sensibility exclusively. Using its power the soul oppresses, terrorizes and forces the disobedient sensibility and natural impulse, and ensures the domination of the soul. However, in addition he says, “the genuine greatness must not cause any horror<sup>12</sup>”, and “mere power may be fearful and immoderate too, but cannot achieve magnificence (Majestaet)”<sup>13</sup>. The reason is that a mere power with fearful severity cannot achieve magnificence or grand dignity. Probably for the grand dignity it is necessary that the force be accepted by subordinates, and is not the lightness which induces their disobedience, but the graveness which makes them think that the ruler is so magisterial and overwhelming that they must unconditionally obey him.

(厳力・OGOSOKA(solemnity)) When the ruler need not show his force ultimately, this kind of dignity can be categorized as solemnity. Solemnity does not show in itself the menacing strength anymore. In contrast to IKAMESISA (the cragginess) as the combatable force of dignity, OGOSOKASA (the solemn) signifies the peaceful supremacy of dignity. It is a gorgeous and gallant style of dignity. In this grand mode the overwhelming power becomes obscure and is only signified indirectly. It shows off the magnificence in a pacific period. Since it is not necessary to put much energy into the severe rule, the surplus power of the ruler is used to create the additional, peaceful quality of a ruler, i.e. solemnity.

The superiority of a person who has dignity is not an ordinary superiority. It is a sovereign supremacy. Solemnity shows his supremacy in its own mode—namely that he is gallant, splendid and lavish because he has plenty of power and surplus. The lifestyle of the person of solemnity is also grand and ceremonious. In contrast to the lifestyle of subordinates, the lifestyle of the dignified is often pretentiously grave and so solemn as to form a great mode of grandeur and the ceremonious. The lifestyle is not only exquisite, beautiful, and splendid, but perfectly sublime.

Fundamentally dignity is an evaluation of the subordinates toward their ruler. They estimate that their ruler is magisterial and solemn i.e. has dignity. Subordinates cannot value their ruler with their own measure, since he seems so fine as to transcend their common style. While the power of his rule is overwhelming, it is located at a transcendent height remote from his subordinates and therefore, is respected by them. And when this dignified rich solemnity becomes the cause of misery in subordinates, they often attempt to deprive him of the dignity and affluence that were contributed by them.

Not only the “dignity of God” but also “human dignity” must have in this way these “magisterial” and “solemn” qualities. The choice between death and life of a dignified person has not only severity but also “cragginess” and “solemnity”. The choice as to whether one should die or live is not a light one. This is a serious, magisterial, grave, steadfast decision. Such a decision is an expression of the greatness and grandiosity of human volition. It may be impressive and solemn for us.

## **6. Respecting dignity**

Subordinates are in awe of their dignified ruler. Whoever doesn't resist or violate the rule, may not suffer the retribution of the ruler, but when he looks at another person who has received severe punishment, he can imagine the pain, and feels fear. The fear is the passion of precaution, and keeps man away from danger in order not actually to suffer the pain of retribution. To avoid the punishment he may become obedient to the rule and ruler.

Awe is not identical with fear. In the latter a person judges the harm to be unavoidable, and girds himself to lessen this harm. Concerning the former he understands on the one hand the unavoidable harm which can

be caused to him by his disobedience; on the other hand, when he is obedient to the ruler, he knows that he is safe, and simultaneously probably prepares to beware, cringe and be tense in front of the ruler. (To be in awe may be different from anxiety, too. In anxiety, the possibility of harm exists, but this possibility itself is uncertain, so man cannot prepare for anything and feels uneasy. However in the state of being in awe, there is no uncertainty and usually no anxiety. A subordinate must receive the punishment absolutely for his resistance, and must fear obviously, but if he doesn't resist or is careful to be obedient to the ruler, he can also be sure of his safety).

The subordinate must feel tension and stand upright in front of his august ruler. If the subordinate relaxes in an untidy posture, so he fails to express an honorific and attentive attitude towards the dignity. This posture is worthy of being punished by the ruler. To avoid this retaliation, one must serve the ruler carefully. The subordinate must be very careful to make no failure in front of the ruler and to respond to him with firm attention. In front of the dignified ruler man usually overstrains himself and his nerves.

The tense attitude of subordinates in front of their dignified ruler, differs from the aggressive tense attitude of a fighter before the battle. It is also not the fearful tension of girding themselves for danger. It is typically the attitude of a servant – tension. As an obedient subordinate, he takes care to maintain his good manners, and is very tense. He tenses and takes care finely so that he does not make any mistake by his carelessness.

Whoever has dignity is overwhelming, grand and transcendent, and his subordinate may be naturally small. This small subordinate makes himself smaller in front of the dignity appropriately. In the presence of the dignified ruler his subordinate should humble himself and hide himself in a corner to show that he is obedient to the rule of the ruler.

Every subordinate must expect severe punishment when he acts in a way directly opposed to the law or order of the ruler. So, to avoid this punishment each servant necessarily makes himself smaller. If someone keeps himself big, he becomes much more noticeable and so more at risk. It's better for a servant to reduce needless actions and shrink himself in front of the ruler who has the dangerous force, so as to avoid a punishment by the ruler. It absolutely represents safety for him. A man should minutely take care not to make any failure of response, and gird and tense himself for his ruler, and make himself smaller. Concerning the dignity of "life" or the "human" also, as with the classical dignity of a king or gods, man shrinks himself, tenses himself, and takes great care not to make any failure of response.

In front of a powerful ruler his subordinates should avoid showing any attitude opposed to his will. Punishment is inflicted usually on the person who opposes the ruler's will. So he should abstain or refrain from opposing the ruler and acting independently. He as an obedient person must abstain from selfish actions, act peaceably and adapt himself to the will of the ruler.

An ordinary man changes his attitude. It depends on whom he speaks with or what kind of group he deals with. In front of a dignified person, the man forbids himself to behave in either an arrogant or a friendly manner. Since dignity is located on a distant height, the man must look up to it, not look down arrogantly on it. The man should refrain from showing this arrogance. Equality is also haughty. In front of a dignified ruler, the subordinate must show his low rank in his attitude, and abstain from everything moderately. In particular, approaching the ruler or being too familiar with him should be done discreetly or abstained from. A dignified object has a height transcending the common, which is subordinate by nature.

### **7. Genuflecting to inviolable dignity**

Whatever has dignity is sovereign and sublime. It transcends commonness. Subordinates and menials should not pull it down into their filthy position. The dignified is untouchable and “inviolable”. Un-dignified subordinates in general maintain a distance from the dignified ruler, respect and bow in front of the dignity. “Whoever preserves a distance from God, suffers from any curse (Let sleeping dogs lie)”. They should take care not to receive a punishment because of the ruler’s outrage which is caused by touching and demeaning the existence of the ruler.

Dignity does not exist in the situation where people stand side by side with each other intimately. When one person bows and genuflects to some person, often the former raises the latter to an inviolable height, so the “someone” becomes the dignified. If they were originally close to each other, the distance is built by the upper by forbidding the lower any contact so as to create the distance between them. Furthermore, the inviolate distance is built by the lower with attitudes such as bowing, avoiding touching the upper, and genuflecting before the upper. Then this inviolate upper rank receives dignity. The inviolable height of the dignified ruler makes his subordinates respect him with distance, and conversely the attitude of subordinates, respecting him with distance itself also creates his dignity. If a man blesses something, genuflects before it and has a feeling that he should keep away from it, so the “something” can become the dignified. In this way a common mountain or a weird snake can acquire dignity.

A dignified thing or person has the character of supremacy. It or he is treated as “the august” by the subordinates. They esteem the supreme as valuable and as emphatically transcending them. Their suitable attitude towards it is “to respect”. They deal with this respectable matter as something precious, lifting it upwards. They maintain a distance from it so as not to pollute it. Or they bow and stand in a lower position so as not to touch him.

Respect is the contrary of contempt. Man discovers the high value of the object, and accepts the fact that the object is positioned above him and behaves according to this fact. It is absolutely not unpleasant but good for him to accept the fact. To avoid the pollution caused by directing a dirty humble eye against a noble being,

occasionally one may refrain from looking up at it. It is obvious that touching is performed from a short distance and must be strictly prohibited because this action pulls the dignified down to the rank of the undignified. For seeing that man need not break this distance, so man need not violate the untouchable dignity. Furthermore, looking at the dignified from a distance means that a man respects and recognizes the distance between them. Looking up at the dignified object, a man can sometimes have a sense of its augustness and feel himself in a noble atmosphere.

Buddhists who respect their supreme Buddha talk about so-called “NEN-BUTSU (to regard Buddha). They say, if they regard (also pray) to Buddha, i.e. have his image in mind and look at Buddha (=KANSOU-NENBUTSU ( to image – to regard Buddha)), they can get Buddha’s salvation. If they can look at Amitabha (infinite Buddha) and his pure land(paradise), merely by this visionary action, in their concept, they can enter half way into the farther paradise. By seeing a dignified being they may be influenced by it.

Respecting is possible not only in the relation of upper and lower ranks, but also in the coordinative relation. Independent persons in this modern time prefer an honest relationship where they can trust and respect each other. However there is no dignity in such a relationship. Dignity can exist only in the relation where subordinates, namely the lower, respect the top, the ruler, are in awe of him, and elevate him as the inviolable supreme.

Subordinates genuflect before the dignified ruler. Their physical expression is to bow, kneel or grovel before him. They show their absolute lowness. And it indicates that they have no rebellious intention and are obedient to him. So they sit in an expressly non-aggressive position where their ruler can attack them easily. Furthermore, it indicates that they are definitely losers, too.

To fold hands before Gods or Buddha may denote that man loses his offensive function of arms (the Christian rosary or Buddhist Juzu may be the metaphor of handcuffs to bind oneself with). And to grovel before them may denote such a non-aggressive posture. Reiterating these performances leads sometimes to keeping one’s life, too. These are expressions of the utmost non-aggressive posture and obedience. Nowadays man grovels only before his gods or Buddha, but at one time, man actually grovelled before a powerful person to express his obedience.

The performance of grovelling or genuflection before the dignity indicates the powerlessness, defeat, and nonresistance of an undignified person. This performance, of course, can also be interpreted as a spiritual genuflection. Because one is completely obedient and genuflects spiritually, one behaves so. These days, there are not so many relationships or situations where such behaviors (genuflecting etc.) can be interpreted as implying respect for someone as dignified. This society is dominated by the social concepts of Democracy and Equality. So it is difficult to find a person who is perfectly respected as the dignified in an interpersonal



relationship; this phenomenon can be seen sometimes in unusual situations such as religious situations etc. However people often genuflect mentally before the dignified. They lose their aggressiveness and become obedient to it and have no intention to be critical. For example, a criticism such as “You violate the sacred (dignity) of life” menaces people and they are embarrassed and may even become nonresistant. Even now, “the dignity” is functioning in a similar way to Mito Komon’s “pillbox”, and can make people mentally genuflect.

### **8. Relief under the shadow of a dignified power**

Essentially, dignity originates from the evaluation of subordinates who regard their ruler as an “excellent ruler”. On the one hand they feel the severity of his rule, but on the other hand regard it as “excellent”. They feel safe under his dignified domination. The state of dignity imposes severe punishment on disobedient people. However, such a state will never interfere with the obedient carelessly or use violent power against them. The strict rule against offences is a way to protect people, functions as security and gives the people relief.

The strong power of a ruler is not esteemed as dignity when this power harms his people and merely brings fear. It becomes the target of disgust or resentment, and is treated as indignity contemptuously. So an organized gang’s power may be strong, but it cannot acquire dignity from the common citizens who are threatened by its violence. Conversely, the police of a democratic nation don’t apply their force violently to citizens in general and can give them relief. The police confront every offender’s violence with their overwhelming power, and protect their citizens from the violence. Regarding them as the reliable comfortable force, their citizens sometimes confer the honor of dignity on them. The reliable policeman who devotes himself to gang eradication, the sheriff who fights against an outlaw bravely, this mighty power of such persons may be responded to with the appreciation of dignity. Excellent domination is quite reliable for subordinates, who tend to depend on it and feel easy in it.

Since human beings are social animals, individuals build the organized entity or group by binding each other in the relation of ruler and subordinate. This organization guards individuals. And this belonging of individuals is regarded as desirable for them. In this community they feel easy. So they willingly unite with the organization and serve it sincerely, too. Naturally, at the top of this organization, a ruler exists. The power of the organization turns into the ruler’s power, and belonging to the organization also means belonging and uniting to the ruler. If the ruler as a person is competent and powerful, his subordinates may regard him as absolute and esteem him as having dignity. The ruler with dignity is reliable. His subordinates can feel easy under his influence, inclining to be his supporters or to show preference for him.

Inside the united organization of subordinates and their ruler, the former feel easy. The subordinates who

regard their section chief as having dignity, unite with their section firmly and are satisfied with it. Here both the president and the manager disappear in the view of the subordinates for the moment, because their chief is top and all. Ignoring the outside of their section, they place their chief at the summit and give him dignity. Having reliance and dependence on him, they are proud of belonging to him.

Through the self-sacrificing voluntary service to the ruler his subordinate confirms that he indubitably belongs to his dignified organization and ruler, and that he can be under his protection. Becoming faithful to the command of the ruler, he strengthens his belonging to and dependence on his organization and ruler. His serving with the devotion of a faithful servant is his glory because his effort constructs some parts of the dignity.

Nature, human beings, or science are conspicuous in our current dignity. Each of them has naturally the power of severe domination (a human being in his ruling imposes his will rigidly, and nature or science also is exact in each rule), but also has reliability and may be consistent with our interests. A human (rational) being with dignity should control human beings and nature rationally. This control must be reliable. The dignity of nature is severe, but the law of nature has no discrimination and the consistency of nature is restful. If man effectually works with it, it is so reliable that it may bring him a supreme mercy. Science is severe on the basis of objectivity, universality, and legitimacy. If man acts according to scientific rationality, it appears to be reliable in contrast with the irrationality of religious belief. When the dignified God says in your divine illusion, "You may throw your mutilated right hand away, it grows again naturally", what will you do? Isn't it more reliable when a dignified science says, "By suture, your hand can be resurrected"? Most of the people may ignore The Words of God (violate the dignity of god), and rely on the dignity of science.

1) I.Kant;*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*. A78 „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E. Cassirer. Bd.4(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*) S.294.

2) I.Kant;*Metaphysik der Sitten*. A78 „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E. Cassirer. Bd.7(*Metaphysik der Sitten*) S.246.

3) cf. Michael J. Meyer ; *Dignity, Death and Modern Virtue*. In "American Philosophical Quarterly" 1995. Vol.32.Nr.1. p.46

4) „Schillers Werke Nationalausgabe“ Bd.20(Philosophische Schriften) Erster Teil. Weimar. 1962. S.298

5) Schiller; *ibid*. S.297

6) Kant; *Kritik der praktischen Vernunft*. A128ff. „Immanuel Kants Werke“ hrsg. von E. Cassirer. Bd.5(*Kritik der praktischen Vernunft*) S.80ff.

7) Kant; *ibid*. A142. Bd.5. S.88.

8) Kant; *ibid*. A152. Bd.5. S.93.

9) Kant; *ibid.* A231. Bd.5. S.139.

1 0) Schiller; *ibid.* S.300

1 1) Schiller; *ibid.* S.300

1 2) Schiller; *ibid.* S.305

1 3) Schiller; *ibid.* S.306

『Hiroshima Interdisciplinary Studies in the Humanities』 (The Graduate School of Letters,  
Hiroshima University) Vol.6. 2007. pp.1-14. 平成 19 年 3 月)